十全同窓会会報 178

2021／5

目　次 | CONTENTS

卒業生に贈る言葉……03
就任挨拶……04
退職のご挨拶……09
退職記念講演会……12
受賞……14
学会報告等……17
論説……19
金沢から世界へ発信……20
医師国家試験結果……21
病院紹介……22
教室だより……24
支部だより……27
同窓生の消息……28
十全昔話……30
学生コーナー……31

2021年度　金沢大学医学部十全同窓会総会

日　時　2021年7月10日(土)　午後1時～
場　所　十全講堂

昨年同様にオンデマンド開催をいたします。映像は後日十全同窓会ホームページで公開いたします。

式次第
一、開会の辞
一、議長選出
一、議長挨拶
一、物故会員に対する黙祷
一、報告　土屋　弘行　理事長
一、医学系・医学類報告　杉山　和久　医学系長・医学類長
一、医薬保健学総合研究科報告　堀　修　医薬保健学総合研究科長
一、先進予防医学研究科報告　田嶋　敦　先進予防医学研究科長
高安賞贈呈式
一、支部紹介
一、議案審議
（一）2020年度事業及び決算報告
（二）監査報告
（三）2021年度事業計画及び予算（案）
（四）役員改選
（五）その他
一、閉会の辞

《教授就任記念講演》午後2時～4時

子どもにやさしい免疫炎症性疾患の早期診断と病態評価　小児科学　和田　泰三　教授
全身性強皮症におけるサイトカイン産生B細胞の機能解析　皮膚分子病態学　松下　貴史　教授
肝移植の最新の進歩と展望　肝胆膵・移植外科学　八木真太郎　教授
救急医療を目指す若者の未来への架け橋になる　救急・災害医学　岡島　正樹　教授

◇教授就任講演は、脳・神経医学領域、がん医学領域、循環医学領域、社会環境医学領域、内科系・外科系医学領域、生殖・発達医学領域のUp-to-dateコースを兼ねます。
◇6－7月時点での新型コロナウイルス感染症拡大の状況により、金沢在住および近郊の会員の出席で開催いたしたく、その場合にはご理解賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

卒業生に贈る言葉

医学類長
杉山　和久

卒業生の皆さん、金沢大学医学類のご卒業、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。最後の学生生活は、コロナ感染症のため十分な実習ができず、教員として心苦しく思います。これから研修医としての新しい生活がスタートします。今までの医学生としての勉強は医師になるための準備であり、これからが医師としての実地の勉強です。卒業生全員が同じスタート台に立ったと言えましょう。「継続は力なり」という言葉があります。何事も諦めずに続けることが重要で、自分の人生をかけたライフワークとなる仕事が1つでも残せたら素晴らしいことです。

私は1984年に金沢大学医学部医学科を卒業しました。皆さんの先輩として、自分の経験から、皆さんが今後どのように勉強したらよいか、私見を述べたいと思います。

1．最初の10年間が重要である：

学生時代に、「最初の10年は大事だから死にものぐるいで頑張れ」とある内科の教員に言われました。また、入局した眼科学教室の医局長からは、「最初の6年で一生の臨床力が決まる」ともいわれました。これは本当だと実感しています。若い時に実地臨床の基礎力を身につければ、後はそれに上乗せで行けます。それには人の嫌がることを進んですることです。私は急患手術にはできる限り参加するようにしました。手術日は外回りでも何でもいいので、とにかく手術室で手術を見ながら雑用をしました。入院患者も進んで受け持ち、主治医として最高10名は持ちましたが、へとへとでした。

2．同僚、先輩、後輩の症例でも勉強する：

これは私のオーベンの先生から教わりました。また、旧第2内科教授であった竹田名誉教授も講義の時に述べられました。自分1人の経験できる症例は限られています。人の症例で勉強するのです。それにはいい方法があります。当直の時や、時間の空いた時に、病棟の全症例のカルテを読み込むのです。眼科病棟には40人の患者さんがいましたので、週1回は全員のカルテを読みました。すると治療経過、検査所見など、診断から治療、管理まで手に取るようにわかりますし、週1回の教授回診が楽しくなりました。

3．英会話の勉強は大切、留学につなげる：

私は学生時代に金大城内キャンパスのESS（English Speaking Society）に所属したものの、途中で挫折して、英会話は苦手でした。ところが、入局した眼科の教授は日系米国人かと思うほど英語が堪能で、舌を巻きました。それに奮起して英会話を一生懸命勉強して、米国オレゴン州ポートランドに留学しました。世界の人々とコミュニケーションをとるのは楽しいですし、若いうちから英会話を勉強して、世界に羽ばたいて欲しいと思います。

4．師との出会いは人生を変える：

私の人生を一変させたのは、一生の師と仰ぐ眼科教授との出会いでした。15年間に渡り師事して緑内障を学び、自分のライフワークとしました。眼科研修医2年目で出会い、人生の目標、研究の面白さ、生きる上での指針を与えられた気がします。皆さんはこれから様々な職場で働くことになりますが、自ら尊敬できる師となるべき先生を求めて欲しいと思います。

最後になりますが、私の所属する眼科学教室の前任の教授であり、元金沢大学附属病院長でもあった河﨑一夫名誉教授の言葉を卒業生の皆様に送りたいと思います。師曰く、「心の真の平安をもたらすのは、富でも名声でも地位でもなく、人のため世のために役立つ何事かを成し遂げたと思える時なのだ。」これを目指して頑張って、一流の医師になってください。

就 任 挨 拶

岡島　正樹　博士
（平成8年卒業）

救急医療を目指す若者の未来への架け橋になる

令和３年２月1日付をもちまして、金沢大学医薬保健研究域医学系救急・災害医学を担当させて頂くことになりました。謹んでご挨拶申し上げます。

金沢大学医薬保健研究域医学系救急・災害医学教授に就任

私は平成8年に本学を卒業し、小林健一教授が主宰されていた第一内科学教室に入局し、広く内科学を学んできました。中でも循環器学に興味を抱き、血管内皮機能に関する研究で学位を取得後、カナダのモントリオール大学心臓研究所生理学教室への留学の機会を与えて頂きました。M. Lavallée教授のもとで、心筋酸素需給バランスの研究に約2年間従事し、生理学実験の厳しさを学びました。帰国後は酸化ストレス、小胞体ストレス、敗血症と交感神経活動などの研究も行ってきました。診療面では、帰国後、学生の頃から抱いていた、全身を診れる急性期診療医師の目標を果たすべく、金沢大学附属病院救急・集中治療部に移籍しました。そこで、内科学教室で学んだ全身を診る視点で外科的疾患を含めた救急・集中治療の研鑽を積みました。また、最近では新型コロナ感染症診療チームの立ち上げに関わる機会を頂き、救急診療に必須の多職種連携診療の重要性と楽しさも改めて学びました。

昨今、働き方改革が進む中、救急医の立ち位置が改めて注目されてきています。それを医学生は鋭敏に感じ取り、救急医を目指す医学科卒業生は毎年相当数います。しかしながら北陸で救急医を目指す若者はほとんどいないというギャップが生じていました。先に記したように、小生が諸先生方にご教授頂いた教育、研究、診療の楽しさを伝えきり、このギャップを埋めることこそ、私の使命と考えています。北陸の救急医療の未来を担う若手を育成し、希望ある救急医療への懸け橋になる、このために精いっぱい精進いたします。十全同窓会の皆さまには一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

稲木　紀幸　博士
（平成9年卒業）

世界で学び活躍できる診療・研究・教育の環境を

このたび令和3年3月1日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系・胃腸外科学教授を拝命いたしました。

金沢大学医薬保健研究域医学系胃腸外科学教授に就任

私は平成９年に金沢大学を卒業後、第一外科学教室に入局し、関連病院での外科修練を経て帰局後、学位を取得いたしました。その後、日本ではまだ黎明期であった低侵襲外科手術の神髄を学ぶため、教室の諸先輩方の御指導のもと、ドイツテュービンゲン大学低侵襲外科部門に約2年間留学し、低侵襲外科手術の臨床、手術機器の研究開発と評価、低侵襲外科手術の指導教育に携わりました。帰国後は金沢大学地域医療学講座、石川県立中央病院消化器外科、順天堂大学消化器・低侵襲外科学教室での研鑽を経て現在に至ります。この間、特に胃癌、食道癌に対する低侵襲外科手術を中心とした臨床研究を行ってまいりました。近年、外科手術において、低侵襲性や合併症の軽減が癌治療後の生存率向上に寄与すると提唱されています。また、ロボット支援下手術がめざましく発展し、外科学は大きな変革期を迎えています。この時期と同じくして金沢大学の外科再編がなされました。私がこれまで培ってきたロボット・低侵襲外科学を、伝統ある金沢大学外科の大きな柱の一つとして邁進させる所存です。また、外科を志す医学生や若手医師が、北陸地域での活動に留まることなく、国内のみならず世界で学び活躍できる魅力的な診療・研究・教育の環境を作ることに努める所存です。

「多様性を尊重し助け合う」、「伝統に敬意を表し革新を目指す」、「地域に密着し世界に発信する」をモットーに金沢大学の発展に貢献したいと存じます。金沢大学医学部十全同窓会の諸先生方には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

金沢大学医薬保健研究域医学系血管分子生理学教授に就任

内藤　尚道　博士

血管研究を中心に取り組み新たな知見を発信したい

この度、令和3年4月1日付けで、血管分子生理学講座（旧第1生理学）の教授に着任いたしましたので、謹んでご挨拶を申し上げます。故上野一晴教授、故齋藤幸一郎教授、永坂鉄夫教授、多久和陽教授が築かれた伝統ある教室を任され、任の重さをひしひしと感じております。

私は平成14年に熊本大学を卒業後、京都大学医学部附属病院および高松赤十字病院で、内科医として主に消化器内科と循環器内科の診療に従事致しました。その後、虚血性疾患、悪性腫瘍、炎症性疾患をはじめとする様々な疾患の病態形成に深く関与する血管の研究に興味を持ち、本学がん研究所で高倉伸幸教授（現大阪大学微生物病研究所）の御指導のもとで、大学院生として基礎医学研究を開始いたしました。研究を開始した当初は、造血幹細胞の活性化機構や血管新生阻害薬の作用機序の解明に取り組み、高倉教授のもと大阪大学で医学博士を取得いたしました。大学院修了後も、血管内皮細胞の多様性に関する研究、血管の恒常性維持機構に関する研究、腫瘍血管を正常化するための分子機序に関する研究などに取り組んでまいりました。今後もこれまでの研究を踏まえ、血管研究を中心に幅広く生命現象の探究、疾患病態の解明に取り組み、新たな知見を金沢大学から世界に向けて発信したいと思っております。そのために基礎の先生方とだけでなく、臨床の先生方、さらにはがん進展制御研究所、ナノ生命科学研究所をはじめとした学内の様々な分野の先生方との共同研究の機会を模索し、連携を重視した研究を展開したいと考えております。

また日本の医学の将来を担う学生、若手研究者、若手医師の教育にも熱意を持って取り組む所存です。さまざまなバックグラウンドを持つ学生や研究者に広く教室の門戸を開き、一緒に研究する仲間を積極的に増やすと同時に、基礎医学研究者と「Physician Scientist」、「Academic Physician」の育成に力を入れ、金沢大学の発展に微力ながら貢献させて頂きたいと存じます。十全同窓会の先生方の一層のご指導とご鞭撻を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

金沢大学医薬保健研究域医学系分子細胞病理学教授に就任

前田　大地　博士

病理学に新たな展開を

令和3年4月1日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系分子細胞病理学分野の教授を拝命いたしました。

私は平成16年に東京大学医学部を卒業し、二年間の臨床研修を経て病理医となりました。以降、継続的に病理診断業務及び病理学的研究に従事してきました。研究に関しては、主に婦人科領域を対象として、ゲノム病理学的アプローチで取り組んで参りました。東京出身で金沢に特に縁があるわけではないのですが、秋田大学での勤務経験があり、日本海側の気候、雪には免疫があります。この原稿を執筆している赴任後4日目の段階で、既に金沢という街から文化、歴史を背景とした厚み、金沢大学の先生方からは温かさを感じ始めており、本学において良質な仕事をしたいという気持ちが高まっています。

さて、私が専門とする病理形態学はVirchowを祖とし、過去約150年間、固定された病変組織を薄切してＨ＆Ｅ染色下で観察する系で運用されてきた領域です。「どのような形態のものが癌なのか」といった基本的な部分でさえ、先輩から後輩への伝承によって成り立っており、謂わば古典芸能に近い世界でもあります。とは言え、40年程前からは免疫組織化学による蛋白発現の可視化が可能となり、私が病理医になって以降は、シーケンス技術の向上に伴って遺伝子異常⇔組織形態変化のリンケージが飛躍的に強まりました。実臨床への還元という観点からは「質の高い診断を下し続ける病理医集団の構築」が当然の目標になりますが、学術的な面では、古典的な病理形態学に新しい展開をもたらすような研究を志向して取り組んで参りたいです。若輩故、至らぬ点も多々あるかと思いますが、金沢大学及び十全同窓会の先生方には何卒ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

金沢大学医薬保健研究域保健学系病態検査学教授に就任

笠島　里美　博士
（平成6年卒業）

病理組織学の面白さを学生に伝えたい

私は平成6年に金沢大学医学部卒業後、金沢大学第一病理学博士課程に進学し、中西功夫教授のもとヒト脳コリン作動性神経に関する研究で学位を取得し、病理組織診断学もご指導頂きました。その後、金沢大学附属病院病理部、国立病院機構金沢医療センター臨床検査科に勤務し、病理組織診断、臨床検査業務を行う日々の中で、個々の症例からの疑問を解明する形で、生殖器、皮膚附属器、乳腺発生腫瘍のホルモン微小環境の研究を進めてきました。また、特殊な線維増生疾患であるIgG4関連疾患では血管での発生を発見し、その病因・病態について免疫異常からのアプローチや、症例の蓄積による臨床病理像の解明も行なっています。今後は、これらの研究を発展させ、世界に発信して行く所存です。

平成29年に金沢大学医薬保健研究域保健学系病態検査学准教授に病理学担当として赴任し、この度、教授に昇進致しました。臨床病理医として得た知識、経験から、患者と向き合う医療従事者の育成を心がけています。病理組織像からの病因・病態の解明は古典的であり、形態の限界も時に感じますが、新規の解析法や概念が現れる度に、同じ標本からでも何度も新たな発見があり、滋味深いです。この病理組織学の面白さをなんとか学生に伝えたいという気持ちで、卒業研究生や大学院生の指導を行っています。また、大学院生を対象とした細胞検査士育成を進め、病理組織学を理解した上での細胞診断を行うカリキュラムを構築しています。微力ではありますが今後も金沢大学に貢献できるよう努力邁進して参りますので、金沢大学及び十全同窓会の先生方にはご指導ご鞭撻賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

埼玉医科大学国際医療センター乳腺腫瘍科教授・副診療部長に就任

石黒　　洋　博士
（平成3年卒業）

がん支持療法領域の教育と研究開発・普及に貢献

令和2年10月1日付けで、埼玉医科大学国際医療センター乳腺腫瘍科教授・副診療部長を拝命しました。がん薬物療法に興味を持ったきっかけは、金沢大学在学中に進行胃癌で父親を亡くしたことでした。腫瘍内科専門医になるため卒後すぐに渡米、平成5年からニューヨーク・ベスイスラエル総合病院での内科臨床研修後に米国内科専門医を取得、ニューヨーク大学病院腫瘍内科・血液科専門臨床研修後に腫瘍内科と血液内科の専門医も取得しました。

帰国後は千葉西総合病院で固形腫瘍から白血病までジェネラルなオンコロジストとして診療と研修医教育に従事しました。その後、千葉大学医学部病態病理学（故）石倉浩教授ご指導の下、病理部医員・大学院生として病理診断および基礎研究に従事し学位（免疫不全状態での腫瘍由来IL-6の抗腫瘍効果）を取得しました。

大学院修了後は福島雅典京都大学医学部教授の下で腫瘍内科医としての研鑽と臨床研究の基礎を学び、がん薬物療法専門医を取得しました。その後、戸井雅和京都大学乳腺外科教授の下で若手の臨床・研究を指導する機会も得ました。京都大学在籍12年間で多数の治験・臨床研究に携わり乳腺専門医も取得しました。医学部が新設された前職の国際医療福祉大学では、英語でのアクティブラーニングなど1～2割が留学生という国際的環境での教育に従事しました。

埼玉医科大学国際医療センターでは、アウトカムをより重要視した質の高いチーム医療を提供しながら若手の医師やメディカルスタッフの臨床及び研究面での教育に携わり、有効性と安全性を最大限に高めた薬物療法や支持療法の研究開発と普及に貢献したいと思います。ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

金沢医科大学脳神経外科主任教授に就任

林　　康彦　博士
（平成3年卒業）

神経内視鏡を幅広く応用させた新たな脳神経診療を展開したい

この度、金沢医科大学脳神経外科の第3代主任教授を拝命しました林　康彦と申します。私は平成3年に金沢大学医学部を卒業後、すぐに脳神経外科学教室（山下純宏教授）に入局致しました。平成6年より大学院の学位取得を当時の第2生化学教室（山本博教授）にて、「試験管内血液脳関門モデルの作成」の研究に取り組み、平成8年に学位を取得致しました。平成12年4月から金沢大学救急部・集中治療部で勤務後、脳神経外科学教室のスタッフとなり、平成15年からアメリカ合衆国の国立衛生研究所の脳神経外科部門に2年余りの留学の機会を頂きました。

「悪性脳腫瘍における水チャンネルの発現と機能」をテーマとした基礎研究を行う傍ら、臨床面では主任教授でCushing病の世界的大家であるOldfield先生の下垂体腫瘍手術を学びました。平成17年に本学脳神経外科学教室に復職後、当時の濵田潤一郎教授より間脳下垂体腫瘍の内視鏡手術を一分野として立ち上げるように言われ、現在まで600例を超える手術を経験させて頂きました。さらに、内視鏡治療の対象となる小児神経外科、水頭症なども専門としてきました。

現在は水チャンネルの研究を脳腫瘍のみならず、脳室内脈絡叢の髄液産生機構の解明に応用することを模索中です。平成18年より講師、同28年より准教授となり、同31年より金沢医科大学脳神経外科特任教授、令和3年4月より主任教授を拝命致しました。今後は専門である神経内視鏡を間脳下垂体腫瘍のみならず、脳室内、頭蓋底などの腫瘍も含めて脳神経外科領域に幅広く応用させた新たな脳神経診療を展開したいと考えています。今後とも皆様のご指導を宜しくお願い申し上げます。

金沢医科大学腎臓内科学教授に就任

古市　賢吾　博士
（平成5年卒業）

全人的な医療を提供出来る腎臓内科学教室を目指して

私は、平成5年に金沢大学を卒業後、小林健一教授の主催される第一内科に入局し、学位を取得させて頂きました。金沢大学附属病院と共に、多くの関連病院でも研修させて頂きました。また、米国NIHのNIAID（National institute of allergy and infectious disease）への留学の機会を頂き、多くのケモカイン受容体を発見されたPhilip M. Murphy博士のもとで研究をさせて頂きました。研究の主なテーマは、急性腎障害と糖尿病性腎臓病であり、炎症や再生および臨床病理学的視点を中心に解析を進めて参りました。

金沢医科大学腎臓内科学は、1974年4月に篠田晤先生が着任して開設され、石川勲教授、横山仁教授と引き継がれ、まもなく50周年を迎えます。腎臓病学の手ほどきを受けた横山仁教授の下で、改めて2年間学ばせて頂き、今回後任として仕事をさせて頂ける事、大変光栄に感じております。歴代の十全同窓会の先輩方が築かれてきた金沢医科大学腎臓内科学の伝統を大切に、教室員の先生方と共に全人的な医療を提供できるような総合的な腎臓内科学を目指したいと思っております。

入局以来、研究および臨床で直接御指導頂いた和田隆志教授、節目節目で適切なアドバイスを頂き、導いてくださった金子周一教授はじめ、同窓会の多くの先生方から頂いた御厚情と御指導に、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。もとより浅学非才の身ではありますが、これまでの経験をもとに、教室の発展に少しでも寄与できるように、最大限努力したいと思います。引き続きの御指導、御鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

小川　武則　博士
（平成10年卒業）

岐阜大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学教授に就任

人の和を大切に
良好なチームを形成

2020年7月1日付で岐阜大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学分野の第6代教授を拝命いたしました。私は、平成10年に金沢大学医学部を卒業後、東北大学耳鼻咽喉科教室で研鑽に努めてまいりました。大学院では分子病理学分野堀井明教授の元で分子生物学を学び、頭頸部癌の薬剤耐性研究を開始しました。大学院卒業後は、志賀清人先生（東北大学第一医科学［岡本宏教授］出身、現岩手医科大学頭頸部外科教授）、松浦一登先生（現国立がん研究センター東病院頭頸部外科科長）の元で、多くの症例を経験し、2010年からは米国ジョンズホプキンス大学シドランスキー教授の元で癌研究を行いました。また、頭蓋底外科は、東京医科歯科大学岸本誠司教授から多くを学びました。これら私の経歴は、沢山の師に支えられたもので、現在は、頭頸部外科、頭蓋底外科を中心とした多くの診療科との合同診療、分子生物学的手法を用いた頭頸部癌個別化医療の研究を行っております。十全同窓会の先生方では、学生時代から気にかけて下さった古川 仭先生、野球部の先輩である吉崎智一先生、脇坂尚宏先生、頭頸部外科の先輩である門田伸也先生は学会でお世話になり、東北大学では中保利通先生（緩和医療科）、八田和久先生（消化器内科）と合同診療をし、留学中には、岩瀬剛先生（現秋田大学眼科教授）と一緒に留学生活を送りました。岐阜大学では、望月清文先生（眼科）、熊野智康先生（放射線科）と合同診療を開始しております。これからも人の和を大切に良好なチームを形成し、診療・研究・教育に一層精進し、耳鼻咽喉科学の発展のために全力を尽くす所存でございます。皆様のご支援ご鞭撻を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

平能　康充　博士
（平成10年卒業）

埼玉医科大学医学部消化器外科教授に就任

体に優しく
精緻で安全な治療を実践、
教育・継承を継続する

令和3年2月1日付で埼玉医科大学医学部消化器外科教授（埼玉医科大学国際医療センター勤務）を拝命いたしましたので、謹んでご報告させていただきます。

私は平成10年に本学医学部を卒業し、渡邉洋宇教授の主宰する旧第一外科に入局しました。関連病院にて外科医としての修練を積ませていただき、平成19年には、消化器外科領域での手術用ロボット（ダヴィンチ）手術の技術習得のために、イタリアのミセリコルディア病院に海外留学し、多くの知識と技術を習得してきました。

より体に優しく精緻で安全な消化器外科手術法の開発を目標とし、金沢大学にて縫合不全を減らすための近赤外線分光装置を使用した吻合部血流の定量化の試みやダヴィンチを使用した胃内手術、経肛門的手術などの開発に従事してきました。そして、平成23年に福井県立病院にて単孔式腹腔鏡下大腸切除術を導入し、これまでに日本で最多数となる1000人以上の大腸疾患の患者に施行してきたとともに、同術式の臨床的・腫瘍学的安全性に関して国内外に報告して参りました。

平成29年に北陸を離れ、帝京大学医学部附属溝口病院にて研鑽を積んだ後、平成31年に消化器外科准教授として赴任いたしました。赴任後は日本有数のハイボリュームセンターにて多くの大腸癌の患者に対して、これまでの単孔式腹腔鏡手術に加えて、当院に先駆けて導入された新型手術用ロボット（センハンス）を使用した大腸切除を積極的に行っております。今後とも、体に優しく精緻で安全な治療の実践および若手への教育・継承を継続して行っていく所存でありますので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

退職のご挨拶

金沢大学医薬保健研究域医学系
ウイルス感染症制御学
市村　宏

この度、2021年3月31日を持ちまして、金沢大学教授を退職となりました。十全同窓会の皆様にはこれまで長きにわたり、ご指導・ご鞭撻を賜りましたことを心より感謝申し上げます。

私は、1980年に山口大学を卒業後、国立呉病院臨床研究部室長、京都府立医科大学助教授を経て1999年5月に国際環境保健学（医科ウイルス学）講座（現ウイルス感染症制御学分野）教授を拝命し、21年11ヶ月にわたって勤務させて頂きました。

ウイルス学を専門分野とし、途上国において、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）/エイズを始めとする様々なウイルス感染症のフィールド研究に注力して参りました。

着任後、ケニアでHIV母子感染予防研究を行ない、短期ジドブジン投与によりHIV母子感染率を1/3に減少させることに成功しました。その成果は、現在ケニアで行われているHIV母子感染予防対策を遂行する上での基礎データとなりました。その後、15年間HIV感染児の追跡調査を行い、ケニアのHIV感染児においてはHIVの遺伝子変異よりも宿主因子（HLA）の方が病気の進行により重要な役割を果たしていることを明らかにしました。また、アフリカやアジアにおいて薬剤耐性HIVについて解析し、その成果は世界の薬剤耐性ウイルスの推移に関するメタ解析のデータの一部として採用されました。

ベトナムでは、HIVを始め、肝炎ウイルスやヒトパピローマウイルスなど様々なウイルス感染症について研究を行いました。最近では、中枢神経症状を伴う重症の手足口病の主な原因ウイルスであるエンテロウイルス71の毒力決定因子を同定することに成功しました。

これらの研究を通して、これまでに、24名（アフリカ人8名、ベトナム人8名）が博士号を、9名（ベトナム人4名）が修士号を取得しました。これらの教育研究活動が評価され、ハノイ医科大学（2011年）とハイフォン医科大学（2012年）から名誉教授の称号を、また、ベトナム保健省から「Medal For People's Health」を授与されました。

教育運営面では、金沢大学学長補佐（国際担当）、大学院先進予防医学研究科長、医学類教育委員長として、金沢大学、大学院、医学類の教育、運営並びに国際化に微力ながら尽力させていただきました。

最後となりますが、十全同窓会の益々のご発展と会員の皆様方のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。誠にありがとうございました。

退職のご挨拶

金沢大学医薬保健研究域医学系
血液内科学
中尾　眞二

私は松田保名誉教授の後任として1999年8月に内科学第三の教授に着任致しました。2年間の海外留学を終え、帰国と同時に第三内科の助手に採用されたのが1989年5月ですので、以後教員としては33年間、金沢大学にお世話になったことになります。十全同窓会員の皆様には長きにわたってご指導とご支援を賜りありがとうございました。

私は同種造血幹細胞移植によるがんの治療に魅了され、服部絢一第三内科初代教授の門を叩きました。入局後は、同種造血幹細胞移植によって誘導される「ドナー由来T細胞の強力な抗白血病効果」に驚かされながら、一方で、自分のTリンパ球によって自身の造血幹細胞が傷害される再生不良性貧血（再不貧）の恐ろしさや不可解さに興味を持つようになりました。両者は表裏一体の関係ですので、再不貧における免疫機序を明らかにすれば、白血病に対する免疫療法にも応用できるのではないか、と考えました。恩師の原田実根講師（九州大学名誉教授）の指導で大学院時代に研究に取り組んだ再不貧における免疫学的機序を分子レベルで解明するため、この領域の第一人者であるアメリカNIHのNeal S Young博士の元に留学しました。2年間の留学中にYoung博士から学んだのは、よい着眼点を持って取り組めば、臨床家であっても独創的な研究ができる、ということでした。

帰国後は、松田先生を始め教室の諸先輩方に暖かく迎えて頂き、優秀な後輩たちに恵まれて、造血幹細胞移植と造血不全の臨床・研究に邁進することができました。1999年の教授選考会セミナーで自分の研究を紹介した際に、当時医学部長をしておられた中村信一先生から「再不貧の原因は、貴君が教授になることによってやがて分かると思う」とコメントして頂いたのが強く記憶に残っています。

若い大学院生の頑張りによって、教授着任後にいくつかの免疫病態マーカーを発見したことをきっかけに全国から患者さんや検体が集まるようになりました。その結果、金沢大学血液内科は我が国における造血不全の臨床・研究のメッカになっています。血液内科のもう一つの柱である血栓・止血グループでは、松田名誉教授のライフワークである播種性血管内凝固研究を朝倉英策准教授が大きく発展させ、今なおこの領域で日本をリードしています。

一方、第三内科のもう一つの診療科である呼吸器内科では、藤村政樹准教授が咳、喘息を中心とする気道疾患、笠原寿郎講師（後に准教授）が肺癌診療の領域で顕著な業績を上げ、第三内科の名声を高めてくれました。その功績もあり、かつての第三内科は血液・呼吸器内科を経て、血液内科、呼吸器内科のそれぞれ単独の教室として独立したことは皆様ご存知の通りです。

私が取り組んできた造血不全の病態解明や造血幹細胞移植の整備はまだ道半ばではありますが、多くの優秀な後輩が道を引き継いでくれることを嬉しく思っています。私も後方支援を続けて行くつもりです。十全同窓会員の皆様には血液内科・呼吸器内科に対する温かいご支援を今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

金沢大学医薬保健研究域医学系
脳老化・神経病態学（脳神経内科学）
山田　正仁

このたび2021年3月31日をもちまして金沢大学を定年で退職することになりました。2000年1月1日に金沢大学医学部神経内科の教授として着任以来21年、十全同窓会の皆様から多大なご指導、ご支援を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

私は1980年3月に東京医科歯科大学医学部を卒業し母校の神経内科に入局いたしました。ちょうど塚越　廣先生が初代教授として着任された時です。駆け出しのころ、塚越先生からお教えいただいたことは「とにかくベッドサイドに行け！」ということでした。先生は毎朝6時半には病棟を回っていらっしゃいました。退任にあたり、金沢大学においても毎朝病棟に行き続けたことを泉下の恩師に報告できますことをうれしく思います。北陸は脳神経内科医が少なく、当科から北陸3県の県立病院を始めとする基幹病院に脳神経内科医を派遣し診療の充実に努めました。神経難病の診療レベル向上には病理解剖が不可欠です。2007年、当地域の神経難病の患者さんをフォローする国立病院機構・医王病院に臨床研究部を設置し剖検を開始しました。当科の神経病理グループと共にこれまでに百数十例を検索し全例CPCを実施しました。いつもCPCの前に標本をみるのを楽しみにしてきました。

研究面では認知症に焦点を当て、疫学から1分子レベルまで広範囲に研究を展開しました。成果として、私達が1996年に初めて報告した「神経原線維変化型老年期認知症」を新たな疾患として確立したこと、プリオン病の実態を解明しプリオン病対策に貢献したこと、アルツハイマー病（AD）脳に蓄積するアミロイドβタンパク質がプリオンと同様にヒト個体間を伝播することを見出したこと、石川県七尾市中島町で2006年から開始した認知症地域コホート研究（「なかじまプロジェクト」）で認知症に対し防御的作用が示唆された食品因子の作用機序をADモデルで解明し予防介入に進んだことなどが挙げられます。その業績により杉田玄白賞、日本神経学会賞、全米医学アカデミー賞などを受賞いたしました。厚生労働省や日本医療研究開発機構（AMED）の７つの研究班の班長として全国の研究者と共に研究を推進し、全国学会を6つ、国際学会を1つ開催させていただきました。

その他では、2014年に文部科学省の人材育成プログラムに採択されて以来、北陸4大学のネットワークを中核とする認知症プロフェッショナル育成プログラム（「認プロ」）をプロジェクトリーダーとして推進したこと、大学院寄附講座「認知症先制医学」を設置したことなどがあります。

多くの優秀な当科関係者や共同研究者に恵まれ、診療、研究、教育に邁進することができました。十全同窓会の皆様に改めて感謝申し上げますと共に、金沢大学医学系ならびに十全同窓会の益々のご発展をお祈りいたします。

退職記念講演会

日時／令和3年3月10日（水）
場所／十全講堂1階ホール

市村宏教授、中尾眞二教授、山田正仁教授の退職記念講演会講演が、令和3年3月10日（水）15時より十全講堂にて開催されました。コロナ感染症の対策を十分にとった上の開催で、多くの先生方に参加していただき感謝しております。

市村教授は1980年3月に山口大学医学部を卒業され、卒業後は鳥取大学大学院医学系研究科を修了し、国立呉病院臨床研究部室長に着任されました。在籍期間中、1985年1月から2年間、米国ベイラー医科大学に、また1991年3月から1年間、米国カリフォルニア州立サンフランシスコ校に留学されました。帰国後は、京都府立医科大学微生物学講座の講師に着任され、その後、同大学の准教授を経て、1999年5月に本学国際環境保健学講座（医科ウイルス学）教授に着任されました。

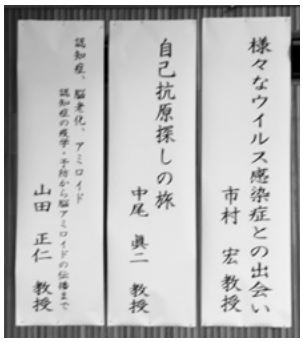
市村教授は慢性B型肝炎患者におけるD型肝炎ウイルス重複感染の影響や、ケニアにおけるHIV母子感染予防対策の確立、エンテロウイルス71感染症重症化に関連するウイルス因子の解明など、顕著な業績をあげられました。

教育面において市村教授は、金沢大学の医学生とベトナム、フィリピン、タイやケニアの医学生との交流の機会を提供する等、学類生・大学院生の教育や国際化に尽力し、多くの優秀な人材を輩出されました。また、平成23年1月にハノイ医科大学名誉教授、平成24年9月にハイフォン医科大学名誉教授の称号を授与され、そして平成28年11月に、ベトナム政府からベトナムの医療発展への多大な貢献に対して「Medal For People's Health」を受賞されています。

管理運営面では市村教授は、副系長、教育委員長、大学院先進予防医学研究科長、そして国際担当の学長補佐を務められました。また、金沢大学、特に医学類や大学院教育の国際化に尽力されました。講演会では「様々なウイルス感染症との出会い」と題したご講演をされました。

中尾教授は昭和55年3月に金沢大学医学部を卒業され、卒業後は金沢大学附属病院第三内科で血液内科の臨床研鑽を積むと共に、医学研究科博士課程で学位を取得されました。昭和62年4月より2年間、アメリカ国立衛生研究所のClinical Hematology Branchで研究生活を送られました。帰国後は、金沢大学内科学第三の助手に着任され、その後同科の講師を経て、平成11年8月に本学内科学第三の教授に就任されました。

中尾教授は日本で最初に骨髄移植を成功させた第三内科の伝統を受け継ぎ、金沢大学を、同種造血幹細胞移植領域にお



ける我が国の中心施設に発展させられました。また、再生不良性貧血や骨髄異形成症候群などの骨髄不全症の病態を診断するために有用なマーカーを次々に発見するなど、この領域における国際的なリーダーとして活躍されてきました。その功績が評価され、2017年には第6回日本血液学会賞を受賞されています。また、大学院教育では、計53人の大学院生の研究を指導し、学位取得に貢献されました。

管理運営面では副病院長、がん医科学専攻長、医学系副系長などを務められ、平成30年4月から2年間、金沢大学保健管理センター長も務められています。講演会では「自己抗原探しの旅」と題したご講演を賜りました。

山田正仁教授は1980年3月に東京医科歯科大学医学部を卒業され、卒業後は同大学関連病院で脳神経内科の研鑽を積まれた後、1988年7月より2年間、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校医学部で博士研究員をされました。帰国後は、東京医科歯科大学助手、講師、助教授を経て、2000年1月本学医学部神経内科教授に着任されました。

山田教授は、学術面では、脳神経内科学、特に認知症に関する研究を強力に推進し、①新しい認知症疾患「神経原線維変化型老年期認知症」の発見と診療への貢献、②プリオン病の実態の解明と公衆衛生への貢献、③アルツハイマー病脳のアミロイドβタンパク質のヒトにおける伝播の解明、④七尾市中島町の認知症地域コホートを起点とする認知症予防法の開発など、顕著な業績をあげられました。その業績により日本神経学会賞、杉田玄白賞、全米医学アカデミー賞などを受賞されました。

教育面では、認知症のプロフェッショナルを育成する、北陸4大学のネットワークを中核とするプログラム（「認プロ」）のプロジェクトリーダーとし貢献されました。また、2005年以来、厚労省やAMEDの7つの研究班の班長を歴任し、全国規模の調査研究事業を牽引しました。

講演会では「認知症、脳老化、アミロイド：認知症の疫学・予防から脳アミロイドの伝播まで」と題したご講演を賜りました。

（杉山　和久：記）

十全同窓会名簿改訂についてのお願い

編集委員会では、各卒業年度からの担当者を中心として、複数の方に会員情報の確認・校正作業をお願いし、遺漏の無いように努力いたします。何分多数、多岐にわたる作業ですのでご協力の程、よろしくお願いいたします。

尚、改訂版の発送は12月上旬を予定しております。

十全同窓会名簿編集委員長　土屋　弘行

受　　賞

IJU top cited article award 2019 受賞

溝上　　敦
（特別会員）
金沢大学医薬保健研究域医学系
泌尿器集学的治療学

この度、2020年度第108回日本泌尿器科学会総会におきまして、International Journal of Urology（IJU）Top Cited Article Award 2019を受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。

今回受賞したのは、（2017年IJUに）publishされた“THERAPIES FOR CASTRATION-RESISTANT PROSTATE CANCER IN A NEW ERA: THE INDICATION OF VINTAGE HORMONAL THERAPY, CHEMOTHERAPY AND THE NEW MEDICINES”というタイトルの論文です。通常のホルモン療法に耐性となった去勢抵抗性前立腺癌に対して、従来から使用されているいわゆるヴィンテージホルモン療法薬と、より強力にアンドロゲン受容体を阻害する新規ホルモン療法薬、タキサン系抗癌薬、骨転移のみを対象とするRa-223というアイソトープ治療薬に関する総説を私がこれまでに行ってきた前立腺癌の基礎研究と臨床経験を踏まえて書きました。現在も前立腺癌に対する新規治療薬が保険収載されつつあり、今後もさらに新しい治療法が出てくることが期待されています。そういう意味において、あらためて様々な前立腺癌治療薬の作用機序、役割を理解しておくことが患者に最適な医療を提供するために必要だと思います。この論文が少しでも多くの泌尿器科医の治療方針に役立ってくれればという思いです。

最後に十全同窓会の先生におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

Top Cited Award 2019（Int J Urol）受賞

中嶋　憲一
（昭和54年卒業）
金沢大学大学院先進予防医学研究科
機能画像人工知能学講座

Bone scan index: A new biomarker of bone metastasis in patients with prostate cancer（K. Nakajima, L. Edenbrandt, A. Mizokami）

標記の論文がInternational Journal of UrologyのTop Cited Award 2019を受賞しましたので、ご報告させて頂きます。この論文は、新しい骨転移マーカーとしてのbone scan index（BSI）に関する総説です。このBSIの考え方は元々米国のSloan-Kettering Cancer Center で1977年に提案されたものですが、その後共同執筆者であるスウェーデンのEdenbrandt教授らのグループが人工知能（ニューラルネットワーク）による骨転移量の計算に成功し臨床応用への道を開きました。私たちも全国の多施設研究で得られた骨シンチグラフィ1532 例を用いて、転移診断の再トレーニングと改良を行い安定したマーカーとして臨床で利用できるようになりました。さらに新規503例で検証した結果から世界的に見ても精度の高いBSI算出ができるようになっています。

BSIは現在国内の核医学施設の約7割に導入され、骨転移量の診断に利用されています。従来、画像で腫瘍マーカーという表現は使われていませんでしたが、このような適応法を「イメージングバイオマーカー」という位置づけで考えるのが適切と考えています。BSIの考え方は転移の有無をAIで自動診断するというよりも、むしろ転移の総量を計算することにあります。つまり、骨転移量を骨全体に対する割合（%）として数値化することです。このため、治療効果判定や予後評価に適した手法であり、現在泌尿器科の溝上敦教授とともに進めている全国規模の前立腺癌骨転移患者のコホートを研究するPROSTAT-BSI研究の基盤となりました。このBSI値が前立腺癌診療の中で治療経過や予後とどのように関連するのか、その最終報告も近日中に公開予定で準備を進めています。会員の皆様のご協力やご支援にも改めて御礼申し上げます。

Sun Pharma RISING SUN AWARD 2020受賞

松下　貴史
（平成11年卒業）
金沢大学医薬保健研究域医学系
皮膚分子病態学（皮膚科学）

このたび、日本研究皮膚科学会Sun Pharma RISING SUN AWARD 2020を受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。本賞は皮膚科学研究の発展に向け、この分野で指導的役割を担う新進気鋭の研究者に対し授与される賞であります。

これまで我々は首尾一貫して、全身性強皮症の病態解明ならびに新規治療法の開発ためにB細胞と抗体を軸に診療と研究をおこなって参りました。この強皮症に対する有効な治療法は未だ確立されておらず、その開発が望まれております。B細胞はこれまで主に抗体産生細胞としての側面から研究が進められてきましたが、近年、サイトカイン産生細胞としての機能が明らかとなりました。我々は世界に先駆けてRegulatory B細胞とEffector B細胞の表現型解析を行い、強皮症の病態形成においてRegulatory B細胞はIL-10産生を介して病態を抑制し、

Effector B細胞はIL-6産生を介して病態を促進することを見出しました。また、B細胞の強力な活性化因子であるBAFFを阻害することによりサイトカイン産生B細胞のバランスをRegulatory B細胞優位とし強皮症が改善しうることを明らかにしました。今後さらに研究を発展させ、B細胞を標的とした新規治療法の開発へと継続していきたいと存じます。

最後に、今回の受賞にあたり臨床・基礎の様々な面でご指導賜りました金沢大学皮膚分子病態学竹原和彦名誉教授をはじめ、研究を支えて頂きました国内外の皆様方に深く感謝いたします。また十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

令和2年度
金沢大学学長賞受賞

大島　　恵
（平成22年卒業）
金沢大学大学院腎臓内科学

この度、令和2年度の金沢大学学長賞を受賞いたしましたことをご報告申し上げます。今回の受賞にあたり、ご指導頂きました和田隆志教授をはじめ、研究室及び共同研究者の先生方に心より感謝申し上げます。

本邦の慢性腎臓病患者は約1400万人と推計され、進行すると末期腎不全及び心血管疾患のリスクが上昇することから、早期に重症化を予測し適切な治療に繋げることが重要となっています。そこで私は、大学院博士課程において、糖尿病性腎症をはじめとする慢性腎臓病の重症化予測に関する研究に取り組みました。まず腎臓におけるApoptosis inhibitor of macrophage（AIM）の沈着を評価し、AIMが腎障害及び蛋白尿と関連することを示しました。また厚生労働省・日本医療研究開発機構研究班（和田隆志班長）で集積しました、2型糖尿病患者4328例の多施設共同コホートを用いて、2年間の推算糸球体濾過量（GFR）の40%低下が末期腎不全を予測する代替エンドポイントとなりうることを明らかにしました。さらにオーストラリアのジョージ国際保健研究所に研究留学する機会を得て、約1万例の2型糖尿病患者の大規模臨床試験（ADVANCE試験、CANVAS試験、CREDENCE試験）のデータを用いて、末期腎不全及び心血管疾患の予後予測に関する研究を進めました。

これらの研究成果を評価頂き、名誉ある賞を頂きましたことを光栄に存じます。今後も慢性腎臓病の病態解明に向けて、努めてまいります。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

令和2年
金沢大学学長賞受賞

阿部　健作
（平成22年卒業）
金沢大学整形外科

この度、大学院博士課程修了に際しまして、金沢大学学長賞を受賞しましたことをご報告させて頂きます。

私の所属した研究班は、骨軟部腫瘍班でした。筋骨格系に発生する腫瘍は希少性が非常に高く、そのため特に悪性腫瘍に対する研究は他のがん種と比して遅れをとっています。それゆえ、臨床・研究双方における大学の役割は非常に大きなものとなっています。その中で私の学位研究は、金沢大学がん進展制御研究所腫瘍制御研究分野との共同研究で、GSK3βを標的とした軟部肉腫に対する分子標的治療に関する研究でした。本研究では、滑膜肉腫と線維肉腫において、CDK-cyclin複合体を介した細胞周期の進行による生存・増殖と、MMP-2を介した浸潤が、GSK3βに依存することが示唆されました。GSK3β阻害効果を持つ薬剤は実際に臨床の場に出ており、drug repositioningの形で臨床応用されることが今後期待されます。この学位研究を軸に、抗癌剤増強効果に関する基礎研究も行いました。臨床でも多くの貴重な経験をさせて頂き、いくつかの臨床研究も行うことができました。これらの研究を元に、国内外で多くの発表をする機会を頂き、いくつかの学会では高い評価を頂くことができました。

これらの集大成として、幸運にも学長賞を受賞させて頂き、大変嬉しく思っております。今回の受賞にあたり、ご指導頂きました土屋教授、山本先生をはじめとする教室の先生方、源教授、堂本先生を始めがん研の皆々様、大学院生活にお力添えを頂いた全ての方々に深謝致します。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2020年日本性感染症学会
学術奨励賞受賞

加藤　佑樹
（平成24年卒業）
金沢大学泌尿器集学的治療学

この度、2020年の日本性感染症学会学術奨励賞を受賞させて頂きましたので、ご報告いたします。これまで金沢大学泌尿器集学的治療学教授溝上敦先生、講師重原一慶先生をはじめとする先生方のご指導のもと、男性不妊患者におけ

受　　賞

る精液中のHuman papilloma virus（HPV）感染を解析・評価し、HPV精液感染により精子の運動率および濃度が有意に低下することが明らかになりました。さらに、一般的に「尿道炎」の原因となる、Mycoplasma hominis、Mycoplasma genitalium、Ureaplasma sppの精液および尿からの検出についても同患者より評価し、これら病原体が男性不妊患者にも一般的に存在することを明らかにしました。不妊症の約半分は男性因子に原因があるとされておりますが、その30～40%は原因不明・特発性であり、生殖補助医療を必要とされる患者さんが多くおられます。これまで、性感染症においては「尿道炎」をはじめとする生殖器の高度な炎症が精子に悪影響を及ぼし男性不妊の原因となりうるとされておりましたが、我々の今回の報告により、高度の炎症が無くても性感染症であるHPVは精子の質を低下させる可能性が示されました。HPVは既にワクチンが存在し予防できるウィルスです。昨年12月には本邦でも9歳以上の男子への接種適応が拡大されました。今後とも我々はさらにHPVの精子そのものへの感染の影響および感染部位について研究をすすめ、性感染症の観点から少しでも不妊症に悩む患者さんへのお力になれるよう努力していきます。今回の受賞にあたりご指導頂きました、溝上敦先生、重原一慶先生、川口昌平先生をはじめ、共同研究の先生方にこの場を借りて深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましても、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。

第4回日本手外科学会奨励賞 田島達也賞受賞

多田　　薫
（平成20年度大学院修了）
金沢大学附属病院
整形外科

この度、第4回日本手外科学会奨励賞田島達也賞を受賞させて頂きましたのでご報告いたします。この賞は日本手外科学会の機関紙である日本手外科学会雑誌に掲載された論文を対象とした優秀論文賞であり、毎年2本の論文が著者の名前順で田島達也賞と津下健哉賞に選出されます。「手」を専門とする手外科医として大変名誉ある賞の受賞を、心から嬉しく思っています。

私の論文「腓腹神経の採取に伴う下肢の愁訴に関する調査」は、末梢神経の欠損に対して下腿から腓腹神経を採取し「自家神経移植術」を行った患者さんの、長期経過後の下肢の愁訴に関する臨床研究論文です。金沢大学では自家神経移植術が発案された頃から先輩方が数多くの自家神経移植術を行っておられたため、研究の対象となる患者さんが多数存在しました。術後30年を超える症例も含まれており、先輩方が見事な治療を行われていたからこそ可能であった研究だと思います。私はon the shoulders of giantsの立場で論文を書かせて頂きました。なお、本研究の結果は現在私たちが取り組んでいる基礎研究の理論的根拠となっています。今後も末梢神経に関する研究を続け、社会に貢献する結果を出すことができればと考えています。

今回の受賞にあたり、ご指導頂きました土屋弘行教授をはじめ教室の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

お知らせ

各支部における同窓生の学術・医療活動状況について、寄稿をお待ちしております。

〒921－8640　金沢市宝町13－1　金沢大学医学部十全同窓会　会報編集委員会
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

お詫びと訂正

本年1月18日発行の会報第177号6ページに誤りがありましたので、お詫びを申し上げ、訂正させていただきます。

〈誤〉瑞宝中綬章　山本　誠（昭和47年卒業）
〈正〉瑞宝小綬章　山本　誠（昭和47年卒業）

学 会 報 告 等

第74回日本臨床眼科学会

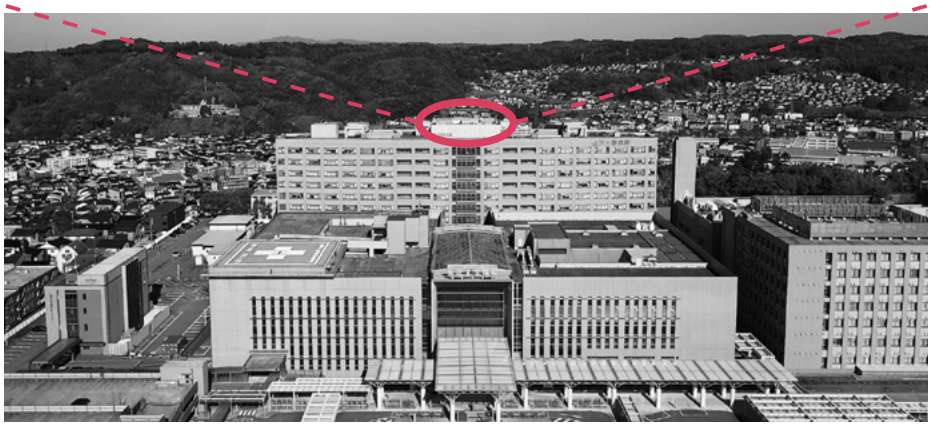
日時／令和2年11月5日（木）～12月6日（日）　WEB開催

昨年（令和2年）の10月15日から4日間、東京フォーラムとJPタワーで開催予定であった第74回日本臨床眼科学会（臨眼）は、コロナ感染症蔓延の影響でWeb開催となりまして、11月にオンデマンド視聴するという形式で無事終了いたしました。学会は11,331名の登録者数で過去最高の人数でした。

本教室の歴史で初めての臨眼の主催とあって意気込んでおりましたが、コロナ感染症のため通常開催は断念しました。誠に残念ではありますが、世界中がこの状況なのでどうにもなりません。しかしながら、Web開催での評判が上々であったこと、自分としては宣伝ビデオや開会式と閉会式の金沢城や兼六園での撮影、ドローンでの大学病院屋上での撮影などとても楽しくできたので、非常に満足しております。

招待講演はシンガポール国立眼センターのTin Aung教授の講演（原発閉塞隅角緑内障）を、私が日本語で副音声を吹き込みましたし、ドイツのハイデルベルク大学のJonas教授の講演（強度近視）の日本語副音声を強度近視が専門の生野先生（いくの眼科、金沢大学学外臨床教授）に吹き込んでいただきました。専門家による日本語副音声で視聴できる招待講演は、初めての試みであり、かつてないほどとてもわかりやすい講演になったと思います。これもWeb開催という利点と、和訳などにご協力いただいた教室の先生（東出先生、小林先生、竹本大輔先生、土屋先生）のお陰です。私は国際シンポジウムや共催セミナーの座長も教授室で務めましたが、初めての体験で結構面白く楽しくできました。特別講演の金沢医大の佐々木教授、新潟大学の福地教授のご講演も素晴らしく、私は2回も視聴しました。また、Webなので、いつでも、どこでも視聴でき、その気になればほとんどの講演を見ることができるのもWebの強みです。学会開催の新しい形態を切り拓いたのだと、何事もポジティブ思考で現実を受けとめました。事務局長の杉山能子や副事務局長の宇田川さんには、大変にお世話になり感謝の念に堪えません。記憶に残る素晴らしい学会が開催できたと、関係の皆様に心から感謝しております。

（第74回日本臨床眼科学会
学会長　杉山　和久：記）



学会開催の最後に金沢大学病院の屋上から手を振る眼科学教室のスタッフと、中央で手を振るスーツ姿の杉山学会長（ドローン撮影）

日本－ポーランド学術交流キックオフ・シンポジウム開催報告

日時／令和3年2月9日（火）、10日（水）　WEB開催

去る2月9日、10日の2日間にわたり、「日本－ポーランド学術交流キックオフ・シンポジウム」がオンラインで開催されました。金沢大学とポーランドとの交流は、2019年、ちょうど日本とポーランドの国交樹立100周年の年に、医療法人社団明徳会理事長 臼井溢先生の御発案で1364年創設のヤギウェオ大学との間で開始されました。その後、COVID-19パンデミックの影響を受けながらも両大学の間でオンライン交流を進め、また、金沢大学前学長 中村信一名誉教授、外務省欧州局、駐日ポーランド大使館など多くの方からの御支援もいただき、2020年12月2日に大学間国際交流協定の締結に至りました。

今回のキックオフ・シンポジウムは、初日が医学・生命科学分野、二日目が人文科学・国際関係学分野の構成で行われましたが、いずれも50～70人の参加者を得て非常に盛況でした。初日は、まず、金沢大学学長 山崎光悦、ヤギウェオ大学メディカル・スクール学長 Tomasz Grodzicki教授をはじめ、6名の来賓の方から開会あいさつを頂きました。続いて、金沢大学研究担当理事・副学長 和田隆志、及びヤギウェオ大学医学部長 Maciej Malecki教授の座長の下、COVID-19、ナノテクノロジー、生活習慣病、学生発表の4つのセッションで進行し、金沢大学からは渡部良広教授、華山力成教授、篁俊成教授、大島恵先生が発表されました。いずれのセッションでも活発な討論が行われましたが、特に学生発表のレベルの高さに両国の研究者から称賛の声が上がりました。二日目は金沢大学国際担当副学長志村恵教授とヤギウェオ大学Leszek Sosnowski教授の座長の下、金沢大学及びヤギウェオ大学双方から3名ずつ発表いただき、近代から現代に至る文化及び文化交流について討論いただきました。ヤギウェオ大学には日本語学科があることもあり、日本文化に興味を持たれている方がたくさんおられることに驚きました。今回のシンポジウムをきっかけに、今後多くの分野での共同研究及び学生交流が発展することが期待されます。

（堀　　修：記）

論　　説

BSL-3感染症実験施設が完成

分子遺伝学・BSL-3整備ワーキンググループ代表　倉知　慎

令和2年度文部科学省補正予算（新型コロナウイルス感染症対策のための研究開発の加速）により整備着手していましたバイオセーフティレベル（BSL）3施設（会報176号41ページをご参照ください）が完成しましたのでご紹介いたします。宝町キャンパスの基礎医学研究棟の一部を改修し、感染症法に定める特定病原体等を適切に管理できるようにバイオセキュリティの観点も取り入れ、培養実験室だけではなくマウスに感染実験を実施できる動物実験室も整備しました。大雪やコロナ禍の影響により工事に少し遅延が生じましたが無事に3月末に完成しました。現在、BSL-3施設を安全に運用できるように管理細則や運用マニュアル、実験従事者への教育訓練体制などについて準備の最終段階にあり、この会報がお手元に届く頃には実験を開始することを目標にしています。

今般のBSL-3施設整備は既存建物の改修工事による設置となりましたので、これまでBSL-3整備区画をご使用されていた研究室・研究者の方には既存実験室の移転や実験中断などで大変なご迷惑をおかけいたしました。ご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございました。また設計、契約、工程管理、運営設計等では金沢大学の微生物等安全管理委員会、遺伝子組換え実験安全管理委員会、動物実験委員会、疾患モデル総合研究センター、研究推進総務係、宝町地区の設備係、総務係、人事係、経理係、調達係、学務係をはじめとする学内の皆様に多大なご助力やご支援を頂きました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

BSL-3施設の設備についてご案内します。BSL-3では病原体が実験施設外へ漏出することを防ぐためにBSL-3実験室の室圧を大気圧と比べて負圧に維持して封じ込めを行います。負圧を作り出すために大きな換気装置を常時稼働させ、BSL-3実験室内の空気は病原体等を捕集するHEPAフィルターを通過したのちに屋外へ排気されます。BSL-3実験室内では実験者を保護するためにカバーオールとエプロン、二重の手袋、フェイスシールドやゴーグル、N95マスクなどの個人防護器具を着用します。感染性のある実験操作は全て安全キャビネットの中で行います（写真参照）。遠心機、細胞培養装置、オートクレーブなどはバイオハザード対応のものを選定しました。マウス飼育装置はケージごとに個別換気を行い、ケージからの排気は2重のHEPAフィルターを通じて排出されます。また廃棄物は全て滅菌処理を行ってからBSL-3実験室外へ搬出されます。このような何重もの物理的な封じ込めと実験従事者への教育訓練を高度に組合わせて、漏出や実験室内感染などの事故を起こさずに感染症に関わる研究を展開できる準備を進めています。

今回のBSL-3施設整備で特に留意したのは独立した動物感染実験室（ABSL-3）を設定することでした。COVID-19を通じて私達はウイルスの排除には抗体だけではなく抗体非依存的な免疫機構も重要であること、感染重症化には免疫応答の暴走が関わること、ワクチン開発迅速化の必要性などを改めて学びました。感染症の克服には病原体側だけではなく宿主側の生体防御機構（免疫応答）を知ることが不可欠です。これは生体（個体）レベルでしか研究することができません。予算とスペースに大きな制約がありましたが、最新の飼育装置を取り入れてABSL-3を設置することができ、金沢大学BSL-3施設の能力を飛躍的に高めることができました。

それではこのBSL-3施設を礎として私達はどのような方向を目指してどのような課題に取り組んでいくことになるのでしょうか。COVID-19は感染症パンデミックに対して我が国の医学・医療の脆弱な点を浮かび上がらせています。残念ながら今回のCOVID-19に対して求められているワクチンや治療薬の開発において我が国は諸外国から大幅な遅れをとっています。グローバル化の結果、感染症が従来想定しえなかった速度で蔓延し、社会経済的にも想像を絶する衝撃を及ぼす時代になりました。感染症パンデミックを克服するにはますます医学・医療の即時対応力と柔軟な連携開発力が重要となります。これらの能力を総合的に高め、将来発生しうる新興感染症パンデミック時に世界に貢献するためには、病原微生物に関するウイルス学・細菌学・細胞生物学的研究、宿主との相互作用に関する免疫学・病理学的研究、治療薬やワクチンなどの創薬的開発を高度に融合して迅速に進めていく必要があります。また、大学においては、感染症に取り組む医学・医療人材のさらなる育成に取り組み、大学・研究機関・医療セクターだけではなく、行政・検査機関・製薬セクターにも送出していく必要があります。さらに、融合的な研究開発と人材育成を通じて国内外の感染症研究拠点と強固な連携体制（研究者ネットワーク）の構築を目指すべきと思われます。今回完成したBSL-3実験室を一つの核とし、基礎医学・臨床医学・社会医学が結集して感染症克服に向けた金沢大学独自の研究開発に取り組んでまいります。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともより一層のご指導とご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

BSL-3施設で実験操作の予行演習。左から石﨑有澄美（平成10年卒業）、玉井利克（平成18年卒業）、倉知慎（平成9年卒業）

金沢から世界へ発信

精神疾患の研究

精神行動科学（神経科精神科）診療科長
菊知　　充
（平成6年卒業）

精神科における医学研究の現状

最初に、精神科領域の医学研究が、やや特殊である点を説明させていただきます。身体疾患に関する医学研究では、多くの場合、病態生理を解明するために、原因となる物質（あるいは病原体）や細胞（がん細胞等）を同定し、それが生体にどのような影響を与えるかに力が注がれてきました。精神科領域でも170年以上前に、グリージンガーがドイツ最初の精神医学教科書の中で「精神病は脳病である」と述べて以降、脳に原因を探す研究が世界で続けられてきました。そして、精神科の代表的疾患である統合失調症や気分障害においては、偶発的ともいえる薬理学的発見から、ドーパミン系、セロトニン系などのモデルが想定されるようになりました。しかしながら、PET等をつかって画像化しても、未だに診断できるほどの精度がありません。さらに、他の身体疾患に関連する医学研究と異なり、ミクロ（細胞）のレベルでの病態生理が、ほとんど明らかになっておりません。つまり、特定の神経細胞の機能障害等では説明できない状況が続いています。現在想定されている病態メカニズムとしては、複数の生物学的要因が重なって、マクロなレベルで、ある程度クラスター化した脳機能障害をきたし、統合失調症、気分障害、発達障害などの一連の疾患群を形成していると思われます。しかしながら、前述のごとく、マクロなレベル（例；脳機能画像）においても、いまだ診断指標となりえるマーカーは見つからないのです。つまり統合失調症、気分障害、発達障害を決定できるような脳の局所的異常は見つかっておりません。そこで、現在では精神疾患は脳全体の神経のネットワーク構造の障害と考えられるようになり、脳内ネットワークの構造に焦点をあてた研究が、人および動物モデルを用いて、世界中で精力的に展開されています。もし客観的バイオマーカーが確立し、それに基づいて精神疾患の診断が再構築されると、治療研究そのものが細分化され、タイプによっては有益性の高い治療法が見つかる可能性があります。

金沢大学における発達障害の臨床研究

我々が研究でもちいている脳磁図計（MEG）について説明します。MEGは神経の活動を磁場の変化としてとらえる装置であり、脳波より、空間的に詳細な情報が得られます。一般的には、てんかんの術前評価や、中枢神経疾患に伴う感覚障害あるいは運動障害の診断に保健適用があります。我々は、2008年に幼児用MEGを世界に先駆けて開発し（図１）、幼児における発達障害の脳機能研究において世界をリードしてきました。例えば、指を動かしたときに生じる大脳運動野の脳活動の、位相と振幅の連動性を評価することで、自閉スペクトラム症の診断補助となる指標がえられることを報告しています。他にも、音声を聴いたときの聴覚野の活動を記録して、幼児期の言語発達との関係を報告してきました。また、幼児期の非症候性のてんかん波の出現頻度が認知機能や脳内ネットワークに及ぼす影響が、定型発達児と自閉スペクトラム症児では異なっている可能性を、世界で初めて報告しました。そして、自閉スペクトラム症と一言でいっても、沢山の多様性があることを脳科学的にも示してきました。

さいごに

発達障害は、自閉スペクトラム症、多動性障害、学習障害等で構成されており、これら全部を考慮すると、小児の10％前後を占めています。小児の10％を占めるということは、成人期においても10％近くのケースが潜在し、環境がミスマッチであれば、生涯にわたる長期間、様々な社会的不適応状態に陥る可能性があります。これらの発達障害の早期診断・介入のため、より客観的な指標で診断を体系化し、病態に合わせた介入方法を探求することで、医学の発展に寄与していきたいです。様々な研究領域の先生がたとの共同研究が不可欠です。最後に寄稿の機会を賜りました絹谷清剛教授および十全同窓会会報編集委員会の皆様に深謝申し上げますとともに、十全同窓会の皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。

図１

医師国家試験結果

コロナ禍の中で実施された第115回医師国家試験の合格者状況が、2021年3月16日、厚生労働省から発表されました。金沢大学医学類の合格状況も含めて報告いたします。

全国の受験者数は9,910名で、そのうち合格者は9,058名、合格率は91.4%（新卒者94.4%、既卒者54.5%）でした。男女別にみますと合格率は男性90.4％、女性93.4％で、合格者に占める女性の比率は33.6％でした。

金沢大学医学類では総数として119名が受験し、109名が合格で合格率91.6%（新卒者95.5%、既卒者37.5%）と、全国平均の91.4％を少し上回りました。この5年間における新卒者の合格率の推移は、96.5％（2016年度）、96.7％（2017年度）、96.2％（2018年度）、94.2％（2019年）、95.5%（2020年度）とほぼ横ばいとなっています。2021年度の新卒者には是非100％を達成してもらいたいと願います。また、実臨床に根ざした出題が増加傾向にある近年の医師国家試験において、既卒者8名の受験者のうち3名しか合格していない状況を今後考えていかねばならないかもしれません。なぜなら、医学類卒業後、既卒生は机上での国家試験対策が中心となり、臨床の現場から離れて時間が経過してしまうことで、最近の出題傾向に対応できなくなる可能性がさらに高まるからです。具体的なものとして、動脈血ガス分析で誤って静脈を穿刺した際の対応、経鼻胃管の挿入方法とコツ、臨床検査における検体量不足の際の測定値の読み取りなど、臨床現場で遭遇しそうな問題が第115回医師国家試験では出題されています。

2020年度は、コロナ禍ということもあり、特に国家試験の前に体調不良やこころの問題を抱えてしまった学類生も少なからずいました。金沢大学医学類医王保護者会、学生支援委員会、教育委員会、医学教育研究センター、学年担任・副担任、チューター教員、学生課学務係の教職員は引き続き一丸となって、学生へのきめ細かいサポートを行っていきます。医学類では、医学教育改革も行いながら、そしてシミュレーター実習室の充実もかなえ、より良い学習環境の整備を行いながら、次代を担う医師・医学研究者の育成に邁進したいと思います。新年度は、より一層の教職員、学生諸君の奮起に期待したいと思います。

（杉山　和久：記）

第115回医師国家試験結果　※（　）内は第114回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
令和3年3月卒業者	111名（121名）	106名（114名）	5名	95.5%（94.2%）	94.4%（94.9%）
令和2年3月以前の卒業者	8名（5名）	3名（4名）	5名	37.5%（80.0%）	54.5%（69.2%）
合　計	119名（126名）	109名（118名）	10名	91.6%（93.7%）	91.4%（92.1%）

十全同窓会名簿
本年12月上旬刊行予定

令和２年度、３年度会費納入の方に発送いたします。

ご注意ください　2021年10月8日（金）を納付期限といたします。

病院紹介

白山石川医療企業団
公立松任石川中央病院

当院の歩み

当院は「心身一如」を信条に、昭和23年、病床数20床、7つの診療科で松任駅前の地に石川郡中央病院として開院しました。昭和43年には石川医療施設組合を設立し、翌昭和44年に病院名を公立石川中央病院に変更しています。多様化する医療ニーズに応えてきた公立石川中央病院は、更なる発展を目指して平成元年現在の地に移転し、病院名を公立松任石川中央病院に改め地域の中核病院として新たなスタートを切りました。平成5年に総合健診センターを開設。平成17年には全国の自治体病院に先駆けて最先端のPETとサイクロトロンを導入し、現在PET-CT3台を備え質の高いがん診断を可能にしました。平成20年には公立つるぎ病院、白山ろく3診療所とともに北陸初となる白山石川医療企業団（構成団体：白山市、野々市市、川北町）へ移行し、公立でありながらも自由度の高い新たな経営形態でスタートしました。こうした中、地域医療への貢献と経営の健全性確保が評価され、2度にわたり総務大臣表彰を受賞しました。平成27年には「地域包括福祉支援センター　おかりや」を開設し、医療・介護・福祉の一体的な提供体制を整え、さらに平成31年にはやわたメディカルセンターのご協力のもと、疾病予防と健康増進を目的としたメディカルウエルネス「ダイナミックHakusan」を開設しております。

当院の現状とこれから

白山石川医療企業団は白山から手取川扇状地まで広域に医療・福祉を担っており、数字では表せない運営上の難しさがあります。これを克服すべく企業団では令和2年度より構成施設の人事・財務の完全一元管理を行い、より効率的な機能分化を図った地域包括ケアシステムの運用を開始しています。具体的には当院が急性期医療を、公立つるぎ病院が回復期医療を中心に、さらに病院付属の福祉施設が地域の介護の一端を担うシステムです。さらに企業団に患者サポートセンターを設け共通の電子カルテシステムのもとで患者の病状にあった効率的な入退院管理を可能にしました。そんな中で急性期医療を担う当院は組織の要であり、これまでも地域・時代のニーズを見極めたうえで先端医療の導入に注力してきました。この度のコロナ禍においても経営が厳しいなか企業団の自由度の高さを生かしていち早くPCRを含めた新型コロナウイルス検査機器を複数導入し、入院予定患者全例の新型コロナウイルス検査を行いました。これにより、スタッフの安心感も増し、予想を上回る診療成績の回復につながっています。これからもさらに積極的に医療資源に対する投資を行っていきたいと考えています。また、働き方改革につながる人材育成にも力を入れており、平成29年に看護師特定行為研修機関の指定を受け、現在第4期となっています。そして、待ったなしのデジタル化等々。

これまでも、そして、これからも、地域の安心・安全を守るべく、現状に満足することなく成長する組織でありたいとスタッフ一同想いを一つにして取り組んでいますが、これも金沢大学十全同窓会の皆様のご支援なくして到底成し遂げられるものではありません。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

（病院長　谷　　卓：記）

概要

白山石川医療企業団　公立松任石川中央病院
所在地　石川県白山市倉光三丁目8番地
病院長　谷　　卓
病床数　305床
（急性期一般275床　精神30床）
診療科数　31

沿革

昭和23年8月	松任町古城町に石川郡中央病院として開院
昭和44年8月	公立石川中央病院に改称
平成元年4月	松任市倉光町に新築移転 公立松任石川中央病院と改称
平成20年4月	白山石川医療企業団公立松任石川中央病院となる

国家公務員共済組合連合会
舞鶴共済病院

沿革

舞鶴市は京都府北部（旧丹後国）に属し、日本海に面する港湾都市として知られています。歴史的には1901年（明治34年）10月に舞鶴鎮守府が設立され、その初代長官に東郷平八郎が就任したことは有名です。戦時中は後方支援都市として軍需産業が振興しましたが、度重なる空襲に襲われ、軍需産業は衰退しました。1945年から13年に亘って66万人余りの引き揚げ者が舞鶴に降り立って母国の土を踏みしめたわけです。その当時最大15万人いた舞鶴市の人口も、現在は8万人を切っています。

舞鶴共済病院は、明治40年3月、舞鶴海軍工廠職工共済会病院として設立され、昭和20年10月に、財団法人共済協会舞鶴共済病院として一般市民の診療にあたることとなりました。その後114年間の長い期間に亘って、その急性期病院としての役割を果たしています。連合会病院は全国32病院あり（その代表的病院は虎の門病院です）、グループ病院としての連携もあります。

当院の現状

舞鶴市を中心に北部京都全体を医療圏とし、20診療科、300床（ICU・CCU10床を含む）の一般病床を有する急性期病院として、医師38人をはじめ計504人の職員を有しています。主な病院機能としては、二次救急告知病院、地域周産期母子医療センター、日本医療機能評価機構認定病院（3rdG Ver1.1）、BFH（赤ちゃんにやさしい病院）認定施設、DPC対象病院で7対1看護体制を導入しています。さらに地域医療支援病院の認定を受け、まさしく地域の基幹病院としてその中心的存在となっています。

今後の展望

当院の北部京都医療圏の中の基幹病院として高度な急性期医療を担う役割を果たすため、平成26年に新病棟を竣工しました。特にがん・循環器に対する医療について、疾患別センター化によるトータルな医療の提供を目指しています。循環器については「循環器センター」として京都府から認可されましたので、循環器内科、心臓血管外科が一体となり心疾患医療の拠点として機能できる体制が整いました。

がん治療におきましても、「がん診療推進病院」の取得をめざし、地域における外科、消化器内科、総合内科、泌尿器科、産婦人科、耳鼻咽喉科、口腔外科等の集学的治療（手術、抗がん剤、放射線治療）および緩和ケアを提供することで地域におけるがん治療の中心的存在となっています。

さらに令和元年にロボット支援手術装置「da Vinci」を購入し、泌尿器科で順調に稼働しています。今後外科、婦人科でも稼働していく予定です。

地域の急性期医療を担っていく病院として、医師の確保は最重要課題です。金沢大学からは整形外科医師3名の支援を受けています。現在は京都府内の病院として京都府立医大からの医師が増加しています。その他福井大学、京都大学、大阪医大などから医師が派遣されています。

当院がさらに魅力ある病院となり、金沢大学の皆さんから選ばれる病院としてご支援いただき、金沢大学関連病院としての伝統を継続したいと考えています。

今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

（病院長　布施　春樹：記）

概要

国家公務員共済組合連合会　舞鶴共済病院
所在地　京都府舞鶴市字浜1035番地
開　設　1907年3月
病院長　布施　春樹
病床数　300床（ICU・CCU10床を含む）
診療科数　20

沿革

明治40年3月　舞鶴海軍工廠職工共済会病院設立
昭和20年10月　財団法人共済協会に移管され、舞鶴共済病院と名称を改める

教室だより

細胞分子機能学

研究

本研究分野では、病態の形成や薬物治療の有用性におよぼす概日リズム（サーカディアンリズム）の意義を明らかにする研究を行っています。約24時間を1周期とする概日リズムは、生体の様々な行動や生理機能において認められ、生体の恒常性維持に役立っています。近年、概日リズムの発振機構が解明され、その本体は時計遺伝子群からなる細胞内体内時計であり、体内時計はほぼすべての細胞に備わっていることが判明しました。そこで私たちは、様々な臓器特異的に体内時計を欠損させたマウスを作製し、各臓器における体内時計の病態生理学的意義を解析しています。これまでに、肝臓の体内時計は肝糖産生を制御することにより空腹時血糖の日内リズムを規定していることや、褐色脂肪細胞の体内時計は脂肪酸利用や熱産生に概日リズムを形成しており、これらのリズムが乱れた状態で高脂肪食を摂取すると肥満が増悪することを明らかにしました。さらに、産科婦人科学研究分野や遺伝子改変動物学研究分野と共同で、子宮の体内時計についても解析中です。これらの結果は末梢臓器において体内時計を整えることの重要性を示しており、生活リズムの乱れによる体内時計障害モデルの作製・解析も行いながら、不規則な生活を送らざるを得ない人々に対する体内時計制御薬の開発を進めています。

概日リズムは病態や薬の体内動態・感受性にも認められるため、薬は有効性が高く、危険性の低い時刻に投与すべきです。そこで私たちは、薬の時間薬理学的特徴を解析し、最適な投与時刻を明らかにする時間治療の研究も行っています。例えば、凝固・線溶系には明確な概日リズムを認めることから、直接経口抗凝固薬は凝固能が高まる時間帯の直前に投与したほうが血栓形成抑制効果に優れることを動物モデルで明らかにしました。

その他にも、内分泌・代謝内科学研究分野や消化器内科学研究分野と共同で非アルコール性脂肪肝炎の創薬標的分子の探索を行うなど、学内外の多くの教室との共同研究を実施しています。

教育

医学類2年次から3年次にかけての「薬理学」の講義と実習を担当しており、学生が薬物治療の基礎をしっかりと学修できるよう、アクティブラーニング、動物実験、シミュレーション、ロールプレイなど様々な手法を取り入れて授業を行っています。また、3年次の「基礎研究室配属」を分担し、MRTプログラムにも参加することにより、医学研究の面白さを早期から医学類生に伝えています。大学院に関しても、所属学生に日々研究指導を行うとともに、「生命倫理学」、「基礎系領域融合セミナー」、「人体の正常と疾病」を分担し、積極的に教育を行っています。

おわりに

非常に小さな教室ですが、金沢大学医学系のさらなる発展に寄与できるよう、スタッフ全員で研究と教育に尽力してまいります。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

（安藤　　仁：記）

スタッフ

教　授　　安藤　　仁
講　師　　長田　直人
助　教　　盛重　純一
大学院生2名、研究生1名、事務補佐員1名、技術専門職員（総合技術部）1名、MRT学生5名

研究分野の沿革

本研究分野は2001年の大学院部局化に伴い、医学系研究科・循環医科学専攻・機能分子医薬学大講座の一研究分野として発足しました。発足当初より、医学科（現・医学類）教育は「薬物治療の基礎（現・薬理学）」を分子情報薬理学研究分野（旧・分子薬理学、吉本谷博教授）とともに担当し、大学院の教育も分子情報薬理学とともに行っていました。2015年に吉本教授が退職されたことに伴い、機能分子医薬学大講座の後任教授として2016年3月に安藤仁が着任しました。

放射線科学

診療

金沢大学附属病院では放射線科・放射線治療科として画像診断、interventional radiology（IVR）、放射線治療を3本柱として診療を行っています。画像診断においては、画像診断を放射線科に集中化させる欧米式の放射線診療システムの構築に古くから取りかかり、各診療科と診断、治療方針に関わるカンファレンスを積極的に行い、チーム医療に寄与しています。IVRにおいても各科と連携し古くから多くの手技に取り組み、低侵襲な治療法を提供できるよう努めています。昨年度のIVRの実施件数は全国19位で、救急対応を含めて多くのIVRを実施しています。また、2017年には北陸では唯一の凍結療法のシステムを導入し、泌尿器科と連携し低侵襲な腎癌の治療に取り組んでいます。放射線治療では、最新治療機器を導入し、高精度で低侵襲な放射線治療の適応に努めており、各科と連携し様々な疾患に放射線治療を行っています。

教育

医学生に対しては、授業や実習にて画像検査、IVR、放射線治療の原理、適応など基礎的な内容はもちろんのこと、放射線診療の面白さ、奥深さを伝え、放射線診療に興味を持つ学生が増えてくれるよう教室員全員で教育に力を入れています。また、将来放射線科以外を志望する臨床研修医を多く受け入れ、画像の読影以外にも検査の適応や、検査機器の特性などを学んでもらい、将来専門分野で画像を最大限活用して頂きたいと思っています。

研究

画像診断部門では、各科と診療を行う中で多くの画像診断の研究を行っています。中でも腹部疾患（膵、胆道、肝）の画像研究は前任の松井教授から蒲田教授に引き継がれ、世界的にも高く評価されていますので以下に簡単に紹介します。膵・胆道領域では、蒲田教授を中心に外科・内科・病理・放射線科による合同カンファレンスでの詳細な症例検討を元に、膵癌の進展度評価に関する画像解析を行い高い評価を得てきました。近年は、膵神経内分泌腫瘍や粘液産生性胆道腫瘍、早期膵癌の画像解析にも力を入れています。肝臓領域においては、前任の松井教授を中心に肝血流動態画像解析を行うことで多くの成果を上げてきました。肝細胞癌が多段階的に発癌することを見いだし、その多段階発癌に伴う血行動態変化の概念を確立しました。近年は肝特異性造影剤を使用したGd-EOB-DTPA造影MRIの研究に力を注いでおり、肝細胞癌における造影機序を解明し、肝細胞相所見が多段階発癌のマーカーとなることを明らかにしました。また、その分子生物学的背景を解析し、良性、悪性を含めた肝腫瘍の病態、画像診断法の確立を目指す研究を行っています。IVR部門では、新しい技術開発や安全性向上のための研究を行っています。肝細胞癌に対する肝動脈塞栓療法は松井教授らが開発したマイクロカテーテルを用いた亜区域塞栓療法は世界の標準的塞栓療法として広く普及しています。ステントグラフト治療も松井教授が開発したM-Kステントを用いて、黎明期よりこの治療に取り組み研究を進めています。放射線治療では、治療効果判定に必要となる放射線治療後の再発様式の研究や、安全な放射線治療の提供のために臓器線量と有害事象の関連性の研究に注力しています。また、関連施設である福井県立病院陽子線がん治療センターとも連携し、陽子線治療に関する研究にも力を入れています。

おわりに

放射線科・放射線治療科は常に臨床各科と連携しながら医療レベルの維持・向上に寄与するのが務めです。今後とも診療・教育・研究に邁進し社会的役割をしっかりと担っていきたいと考えておりますので、益々の御指導・御鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

（米田　憲秀：記）

スタッフ

教　授　蒲田　敏文
名誉教授　松井　　修
准教授　香田　　渉、小坂　一斗（放射線部）
特任准教授　吉田耕太郎
講　師　北尾　　梓、高松　繁行（放射線部）
助　教　井上　　大、米田　憲秀（医局長）、
　　扇　　尚弘、奥田　実穂、戸島　史仁
特任助教　柴田　哲志、五十嵐紗耶、松原　崇史
他医員15名

研究分野の沿革

当教室は、1917年に金沢医学専門学校に理学的診療科として発足しました。その後金沢医科大学への移管を経て、1949年に金沢大学医学部放射線医学講座となりました。そこから、2001年の大学院大学化や2012年の大学院研究科の改組や2016年の大学院の改組を経て、現在の金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 内科系医学領域 放射線科学となりました。第三代教授松井修時代に教室は肝臓の画像診断、IVRを柱に大きく発展し、2013年6月には、蒲田敏文が第四代教授に就任し、現在に至っています。

金沢大学医学生と「生と死」を考える：麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

図1

がん緩和医療の臨床では、治療を継続できず、人生の最終段階を迎える患者さんとその家族に対応しなければなりません。そのため医療者自身も常に生と死について考え、死にゆく人に寄り添う態度や姿勢を育成する必要があります。金沢大学医学類5年生のがん緩和医療臨床実習では、スピリチュアルケア入門：生と死を考えると題して、医学生全員に「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、詩、漫画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は苦境の中をいかに生きることができるのかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」との課題を与え、実習内にプレゼンテーションを行い、500字前後のレポートを提出させてきました[1-2]。

平成31年度（令和元年度）の医学類5年生の実習では、1）アンブロワーズ・パレの言葉「治すこととときどき、和らげることしばしば、慰めることいつも」と、2）キューブラー・ロスの死にゆく人の心の動きの5段階「否認、怒り、取引、抑うつ、受容」を何度も取り上げ、慰めるとは何か、受容とは何か、どのように考えられるのかを問いかけたことから、それらを含めて医師としてのあり方に言及したレポートが多くありました。

令和2年12月に、全員のレポートと実習時の写真をまとめた冊子：金沢大学医学生と「生と死」を考える（第9号）を発刊しました（図1）。医学部や大学病院では、科学的な考え（分析的で客観的：analysis）が大勢をしめていますが、臨床の現場で生と死を考える時には哲学的な考え（類比的で主観的：analogy）が必要になります。金大病院緩和ケアセンターでは、医学生だけでなく、医師、薬剤師や看護師等の医療者にも、上記の哲学的な考えの重要性を伝える活動を続けています。

平成31年度（令和元年度）の医学類5年生は、今年（令和3年）3月に卒業し、新年度からは医師として新しい人生が始まります。患者さんのためにも、自分のためにも、科学的知性だけでなく哲学的知性を自身の中に取り込み、人間性豊かな優れた医療人に成長して頂きたいと願います。最後に、第9号で特に印象に残ったN君のレポートを紹介します。

「医師を志すにあたり注意していること」

今まで誰にも話さなかった弟のことを取り上げました。彼は生まれながらにしていくつもの障害を持っており、十数回も眼科の手術を受け、Wilms腫瘍などの治療も受けていました。知的障害もあるため言葉は話せませんでした。しかし困難を抱えながらも、一緒に遊んだり、旅行に出かけたり幸せに暮らしていました。幼いながらに私は、将来は医師になって弟のような子供たちを助けたいと思っていました。

私が小学5年生の夏休みに、マレーシアに単身赴任していた父のもとへ家族全員で出かけました。楽しく食事をとりアパートに帰ってきた夜に、弟がいないという母の慌てた声で目が覚めました。いつものようにどこかに隠れているのだろうと思い、部屋中を探しましたが見つかりません。窓が開いていたので、まさかとは思いながら42階のアパートから降りて外を探すと弟が倒れていました。これまでに聞いたことがない母の悲鳴とともに、私の周りの現実感が急に薄れていきました。当時の私は、死とは病気でじわじわ寄ってくるものだと思っていましたが、さようならも言えないほど突然やってくることを学びました。その晩に「おやすみ」と言わなかったことを今でも後悔しています。

その後の長い間、母は落ち込んでいました。私も一緒に泣くこともあれば、少しでも元気になってもらおうといろいろなお世話やお手伝いをしました。母まで自殺してしまうのではないかという恐怖がありました。長い長い光の見えないトンネルの中にいる感覚でした。次第に母にも笑顔が戻ってきた時は本当に安心しました。

弟のおかげで私は、患者と家族の気持ちと苦しみを経験しました。そんな私が常に意識していることは、疾患のことよりも、患者さんや家族などの気持ちです。私達にとって医療現場は日常ですが、患者さんや家族にとっては非日常です。学生だからといって、そこに配慮しない行為や態度を示すことは絶対にしてはいけないことだと思っています。私は弟のことを忘れず、医師として働くようになっても、患者さんや家族などのスピリチュアルペインを少しでも和らげられるようにしたいと思っています。

1）山田圭輔：金沢大学医学生と「生と死」を考える報告集（第8号）の紹介. ペインクリニック 41, 789−792, 2020.
2）山田圭輔：金沢大学医学生と「生と死」を考える報告集（第9号）の紹介. ペインクリニック 42, 547−549, 2021.

支部だより

愛知支部

令和2年10月31日（土）に愛知支部の臨時総会を名鉄グランドホテルにおいて開催しました。当初は6月に予定していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により多人数の集まりが憚られましたので無期延期としていました。9月に一部の幹事が集まり、年1回の顔合わせと講演会を主体とした臨時総会にしようとのことで急遽感染症を専門とする先生にご講師を依頼しました。たまたま第3波前の小康気味の時期となりました。本部からの来賓招請は見合わせとし、勤務医療機関からの飲食を伴う集会への不参加要請や高齢で感染に対する不安を理由に欠席とされた先生も多く、会員の参加者は例年の3分の1以下の11名でした。

まず、昭和31年ご卒業の高澤嘉人先生と大野義彦先生の訃報に接し、ご冥福を祈り黙祷を捧げました。その後、今の社会状況から支部長を1年延長して頂いた水上哲秀先生の挨拶と事務連絡を手短に行い2題の講演会へと移りました。

最初に愛知医科大学病院感染症科特任教授の山岸由佳先生に「新型コロナウイルス感染症に関する最新の話題」というテーマでお話を頂きました。本ウイルスの話題は玉石混交巷に溢れていますが、専門家としての最新の情報収集と分析を踏まえた知見には卓越したものがあり、医療現場で役に立つ内容も多く会員一同益するところ大でした。続いて名和昆虫研究所理事長・所長兼博物館館長の名和哲夫先生に「昆虫から学ぶ自然～昆虫おもしろ話～」と題して、人と自然と昆虫のかかわりについてご講演を頂きました。希少種の保護といっても生息する自然が保たれることが前提であるなど含蓄のあるお話を聞くことができました。実物の標本や捕虫網を使ったチョウの採り方の実技を見せて頂き、皆昆虫少年に戻っていました。

この後、会場側の配慮により少人数のテーブルで短時間の静かな会食をし、名古屋市立大学病院整形外科教授村上英樹先生によるマスクをしたうえでの万歳三唱でお開きとなりました。

本稿は令和3年1月初旬に書いたものです。変異種、ワクチン接種、緊急事態宣言などが話題となっているものの、先の展開が読めない状態です。一日も早い終息あるいは安全な共存を願わずにはいられません。

（篠田　雅幸：記）

同窓生の消息

令和2年度外務大臣表彰を受賞して

金沢大学保健学系・客員教授
城戸　照彦
（昭和54年卒業）

令和2年12月に、日本とベトナムとの相互理解の促進に大きく寄与したとして、外務大臣表彰を受賞しました。

2001年に初めてベトナムを訪れ、ハノイ医科大学の研究者と共同で枯葉剤・ダイオキシンによる健康影響に関する疫学研究を開始しました。当初は大変微量なダイオキシンの個人暴露量を計測することが困難でした。幸い金沢医科大学ハイテクリサーチセンターで母乳中ダイオキシンを測定することができ、散布後30年以上経過しても対照地区より2-3倍高いことを明らかにしました。2008年以降、調査地区をダイオキシンのホットスポットである旧米軍基地周辺に移し、母子のコホート研究を毎年継続し、その結果、汚染地区の小児でステロイドホルモンがかく乱され、低体重児の出現率が高いことを明らかにしました。

そこで、地域貢献としてJICA草の根技術支援事業に応募し、幸い全国で5件採択の1つに選ばれました。2019年より該当地域の母子保健活動を始め、基幹病院の医療スタッフへの現地研修を実施しました。2020年はコロナ禍で訪越できませんでしたが、オンラインで現地の18のコミューンを繋いで、計131名のヘルスセンタースタッフ全員への研修が実施できました。

今回の受賞はこれまでの活動が一定評価されたのでしょうが、それ以上に、今後の活動への期待が示されたものであり、現地と協力して将来の彼らの自律的な活動に繋げたいと思っています。

また、寄附による発育不全児への粉ミルクや離乳食の無償提供を2020年より開始しています。同窓会の皆様でご支援いただける際は、右記へご連絡をお願い致します。

ベトナム枯葉剤被害の子供サポート事務局
vietnam.kareha.kodomo@gmail.com

令和3年度文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞して

金沢大学医薬保健研究域医学系血液内科学名誉教授（現石川県赤十字血液センター所長）
中尾　眞二
（昭和55年卒業）

このたび、「高感度フローサイトメトリーによるPNH型血球検出法の開発」に対して文部科学大臣表彰を頂くことができました。本表彰のためにご推薦頂きました金沢大学、十全同窓会の諸先生方のご支援のおかげと思っております。どうもありがとうございました。

再生不良性貧血や骨髄異形成症候群などの造血不全は、血球減少の存在や血球形態によって診断される症候群であるため、かつては病気の性格が分からないまま、免疫抑制療法や造血幹細胞移植などの治療が闇雲に行われていました。私達は、微少なPNH（paroxysmal nocturnal hemoglobinuria: PNH、発作性夜間ヘモグロビン尿症）形質の血球を検出する高精度フローサイトメトリーを開発することにより、このPNH型血球の存在が、造血不全の発症に免疫が関与していることを示す優れた指標であることを約20年前に見出しました。その後、この結果が国際的に確認され、私達の特殊検査が世の中に普及した結果、現在ではほとんどの造血不全患者さんが、病態に即した適切な治療を受けられるようになっています。今回は単名での申請が求められましたので私が表彰の栄誉に浴しましたが、実際には血液内科の多くの仲間による共同の成果であることを申し添えます。

令和2年度厚生労働大臣表彰を受賞して

社会医療法人財団董仙会恵寿総合病院理事長
神野　正博
（昭和60年度大学院修了）

3月27日付で「多年にわたる病院事業の発展向上に寄与」ということで、厚生労働大臣表彰をいただいた。地域における病院事業と14年にわたる公益社団法人全日本病院協会における理事、副会長としての業務によるものらしい。

これまで社会保障国民会議、社会保障審議会医療保険部会、同医療部会、医道審議会医師臨床研修部会、同看護師特定行為研修部会、医療従事者の需給に関する検討会、中医協・入院医療分科会などで、ある時は厚生労働省のお太鼓を叩いたものの、それ以上に机を叩いて異議を唱え変革を迫った。そういう意味で、今回の受賞は厚生労働大臣の懐の深さを感じながらも、面映ゆい。

こういう表彰をいただけたのも、地域において病院を支えてくれる患者、地域住民、行政、大学医局やパートナー企業、そして私を快く主張の場に出してくれた法人、病院スタッフのおかげと感謝している。したがって、私個人ではなく、この環境に対する表彰だと思っている。

ありがとうございます。

医学教育研究寄附金

ご寄附をいただきました。
本学類、系が行う教育・研究にご賛同賜り、深くお礼申し上げます。

高櫻　英輔
（昭和40年卒業）

十全昔話

大学を卒業してからの半世紀

島　利夫
（昭和42年卒業）

昭和36年（1961）入学し多くの教授、医局員教室の先生方友人と過ごした金沢での18年間には筆舌に尽くしがたいものがあります。この時代、医学部医局、大学院の改革を求める医局員学生と大学の紛争が全国的に起きていました。昭和42年卒業の私達はインターン制度の最後の学年でした。クラス会議がカリキュラムを作りインターンは自主研修でした。インターンの終わる頃、形骸化した大学院を受験するかボイコットするかのクラス全体会議が行われました。討論の後クラス決議し、クラス決議を破った者はクラス会から除名すると決めて採決しました。その結果は同数になりました。さてどうするかでクラス会が騒いでいた時、いつも授業に出て来ない同級生が遅刻して入って来ました。みんなは一斉に彼を見、司会者は「大学院ボイコットはどうする？」と尋ねると、「そんなもんボイコットに決まっとる」と答えました。大学院を受験しようと準備していた半数の人は受験を辞退しました。これも民主主義なのかとしみじみと思いました。後年受験した人もボイコットした人も和解してクラス会はまとまりました。引き続いて、医師国家試験ボイコットが全国的に拡がり、我々も医師国家試験をボイコットすることになりました。

私が卒業して金沢に残るか関東に出るか、何を専攻するかどこの医局に入るかは大きな問題でした。結局金沢大学脳神経外科に入局しましたが、大きな夢と希望を持って入局してもどの教室も大学紛争に疲弊し東日本大震災の後のような感じでした。日本の20年先はアメリカにある。アメリカで生活したい。世界のトップの先生に学びたい。そしてアメリカに行ってから医局を出ると決心しました。現実は研究が何もできてない、実績がないのでECFMGしかアメリカで認められるものはありませんでした。昭和51年、自分で応募し頼んでclinical fellow, research fellowとしてMayfield Neurological Institute、The Christ Hospitalに留学し、3日に1回の当直と臨床と動物実験をしてきました。

昭和55年（1980）横浜市栄区の横浜栄共済病院に脳神経外科初代医長として赴任しました。母校の医局から遠く、近隣に頼る病院もなく、知り合いを求めて十全同窓会神川県支部総会に出席しました。大学からの援助なく脳神経外科診療を一人でやるには限界あり、自分の思うようにはできないと感じ、昭和58年（1983）川崎に救急告示有床脳神経外科整形外科医院を開設しました。大学で脊椎手術を専門にしていたので整形外科を診療科目に入れ、neuro-orthopaedicの境界をやろうと考えました。周りは4大病院に囲まれていましたが、川崎市に救急医療体制はまだ確立していませんでしたので開業して５カ月目に救急告示診療所として認可されると、川崎市全区から急に救急車が来るようになりました。現在整形外科は十全同窓会会員の櫛田和義先生をはじめ優秀な先生達と協力してやっています。

開業と同時に医師会に入りました。十全同窓会会員の上田巌先生は川崎市医師会議長をされており、色々とアドバイスを戴きました。平成14年（2002）4月中原区医師会長になりました。中原区は川崎市の中央にあり人口は261,825人（2019）でまだ増加し医療機関も増加しています。会長になってそれぞれの病院長との連携も密になり関東労災病院研修医の地域医療連携協力医療機関になりました。

平成26年（2014）、私は小島路久先生から神奈川県支部長を引き継ぎました。平成28年（2016）十全同窓会本部のご協力を得て神奈川支部会員を調査し、神奈川県支部総会を開催しました。会員総数255名に総会案内状発送し、参加53名、不参加202名、総会出席率は21％でした。金沢を離れても、素晴らしく活躍されている会員が多いことに感銘を受けました。

金沢大学医学部十全同窓会名簿通常会員Ｉの1頁に金沢医学館、金沢医学所、金沢医学校卒業名簿があり、その中に勝見正成先生の名前があります。鎌倉市医師会の正山堯先生（鎌倉内科診療所）が、勝見正成先生が初代鎌倉医師会長であり、その墓が鎌倉大仏の長谷寺にあると報告されました[1)]。勝見正成先生は安政６年1月23日に生れ、加賀藩士の子であり、明治9年金沢医学所に第6期生で在籍17才から医学を学び、29才に鎌倉で最初の開業医になり、明治25年（1892）33才で鎌倉町に医師会を設立し初代会長を務められました。平成15年（2013）鎌倉市医師会創立120周年記念事業として勝見正成先生の墓所整備と記念碑建立され、その裏面には谷野淳先生をはじめ鎌倉で開業されている十全同窓会の先生方の名前も刻まれています。はるか昔に故郷を離れ鎌倉に名を残された大先輩の勝見正成先生の偉業に敬服しております。

私が医師になった頃は、現在一般的に使用される薬剤は殆ど誕生しておらず、脳外科手術をしてもしばしば致死的な転機をたどるという、現代医学の初期の時代であり、様々な産みの苦労を経験しました。現在には現在の苦労があろうと思います。それぞれの世代で、しっかりと次世代に引き継げる財産を築きあげていただきたいと思います。

1）鎌倉市医師会創立記念講演会　勝見正成初代鎌倉医師会長とR.コッホ記念碑　ビデオ　正山堯　2020.12

学生コーナー

バラナシでの体験を「振り返る」

医学類４年
守田　周平

「振り返り」、皆さん普段の生活からしていますか。私はできていません。小さいときは学校で何をするにしても「ふりかえり」を書いたものですが、いざ実生活になると自分から振り返る時間を設けるのは難しく思えます。

2020、21年と新型コロナウイルスの感染拡大によって皆さんの生活は多かれ少なかれ変化があったのではないでしょうか。実際に自分や身の回りに感染者が出た人や、感染しないために生活を制限せざるを得なくなった人、様々だと思います。他には、楽しみにしていた旅行やイベントが延期・中止になり悲しんだ人も多いと思います。そのため、この期間を振り返ったときにぱっと思い出を語れる人は少ないのではないでしょうか。私も2020年前半はCBTとOSCEの勉強、それが終わると臨床実習が始まりました。平日は病院で実習をするのですが、週末は新型コロナウイルス感染予防のため、どこかへ気軽に出かけることもできず、我慢の日々が続いています。そんな中、この文章の執筆締め切りが迫ってきました。文章の内容は自由とのことらしいのですが、それが一番困りました。何を書いたらいいのか迷いましたが、いい機会だと思い、自分の体験を「振り返る」ことにしました。

私は旅行が趣味です。COVID-19が世界で流行する前はお金を貯めては海外に行っていました。その中で一番印象に残っているのは2019年8月、インドへ行った時のことです。

始まりは単なる思いつきでした。5月中旬、学内の試験勉強をしている際にふと現実逃避で、夏休みにどこか行きたいと思いました。小中学時代からの仲で、タイによく行く友人がいたので、二人でどこかに行かないかすぐに連絡しました。友人は快く了承してくれ、そのままどこに行くか相談しました。この二人で行くのだから、普通の観光ではない何かをしたいということになり、インドに行くことを決めました。最終目的地はバックパッカーの聖地バラナシ、荷物とお金は必要最低限に減らして挑戦すること、事前にあれこれ調べず、現地でその都度対処しようということになりました。行き先が決まったら即行動、すぐに航空券を購入しました。

バラナシはヒンドゥー教の聖地で、首都デリーから約820km離れた、ガンジス川が流れる街です。バラナシでは夜明けからヒンドゥー教徒の方々がガンジス川で沐浴をし、心身を清めています。これは皆さんもよく知っている事かと思います。しかし、バラナシにはもう一つの重要な意義があります。人々の命の終着点です。ガンジス川沿いには大きな火葬場があり、24時間火が絶えず燃え続けています。ヒンドゥー教で亡くなった方は皆ここに運ばれ、家族が見守る中、荼毘に付され、遺灰はガンジス川へ流されます。ヒンドゥー教ではバラナシのガンジス川沿いで亡くなった人だけは輪廻転生の多大なる苦しみから解き放たれるといった考えがあります。そのため、バラナシには毎日多くの亡くなった方々、その家族たちが訪れます。どんどん運ばれてくる遺体、多くの人々に見守られながら燃えて灰になっていく命、それは皆ガンジス川へと流される、なんとも不思議な光景でした。

火葬場の近くにムクティ・バワンという場所があります。死期が近づいた人は、家族とともにここに来て、死が訪れるのを神に祈りながら待ちます。私は初めてこの光景を見たとき、不謹慎ながら美しいとさえ思ってしまいました。もう幾ばくも残されていない命、最期の瞬間が近づいているのに彼ら彼女らは死など恐れてはいません。ヒンドゥー教徒としてバラナシで命が尽きることは、とても幸福なことだと教えてくれました。

夜にはガンジス川沿いのダシャーシュワメードガートという場所で「プージャ」という祈りの儀式が行われます。これは毎晩行われていて、ガートは人で埋め尽くされます。インドのカースト制度で最上級のバラモンが祭壇に登り、神への祈りを捧げます。人々もバラモンに合わせて祈りを捧げます。毎日たくさんの命が流されるガンジス川で、夜は神に感謝する。

インドでは様々な人との出会いもありました。デリーではある少女に出会いました。彼女は見た目7,8歳くらいで、裸足にぼろぼろの服を着ていました。通りを歩いている人々に声をかけて何か売ろうとしているようですが、すげなくあしらわれ、店の前にいると店員が出てきて追い払われていました。遠くから私たちを見つけるとこちらへ近づいてきました。英語で話しかけても、彼女は英語を話せない様子で、黙って持っている品の使い方を私に見せてくれました。それは日本円でおよそ70円の布製の折り畳みうちわでした。私は1つ購入することにし、何種類かある中で、少女が勧めてくれた柄のうちわを買うことにしました。購入後、私は友人と相談し、持っていた食べ物や水をあげることにしました。女の子はとても喜んだ様子で、近くにいた家族と思われる人たちを呼び、何度もお礼の気持ちを顔や態度で表現してくれました。その日を「生きる」のも大変な人たちがいる、知識として知っていても、実際に会って交流すると考えさせられました。

日本語を話す人もたくさんいました。日本語をインド滞在中に聞くことはないと思っていたので嬉しくなり、彼らに話を聞くと、日本語は独学で勉強したとのことでした。いずれは日本に行って働きたいとも話してくれました。結果的には彼らの９割はいわゆるぼったくりで、観光に来た日本人に親切に声をかけ、仲良くなっては相場の３倍ほどで茶葉やスパイス、織物を売りつけているようでした。それを知って初めは悔しいと思いました。しかし、旅の途中、かつてインド大使館で働いていた方と話す機会があり、彼らは貧しく学歴も技術も無いが、生きるために日本語を学び、あの生き方を選んだのだと聞きました。生きるために必死に頭を使い、生活する彼らを知ってからは、ぼったくられた事を単純に悔しいとは思えなくなりました。

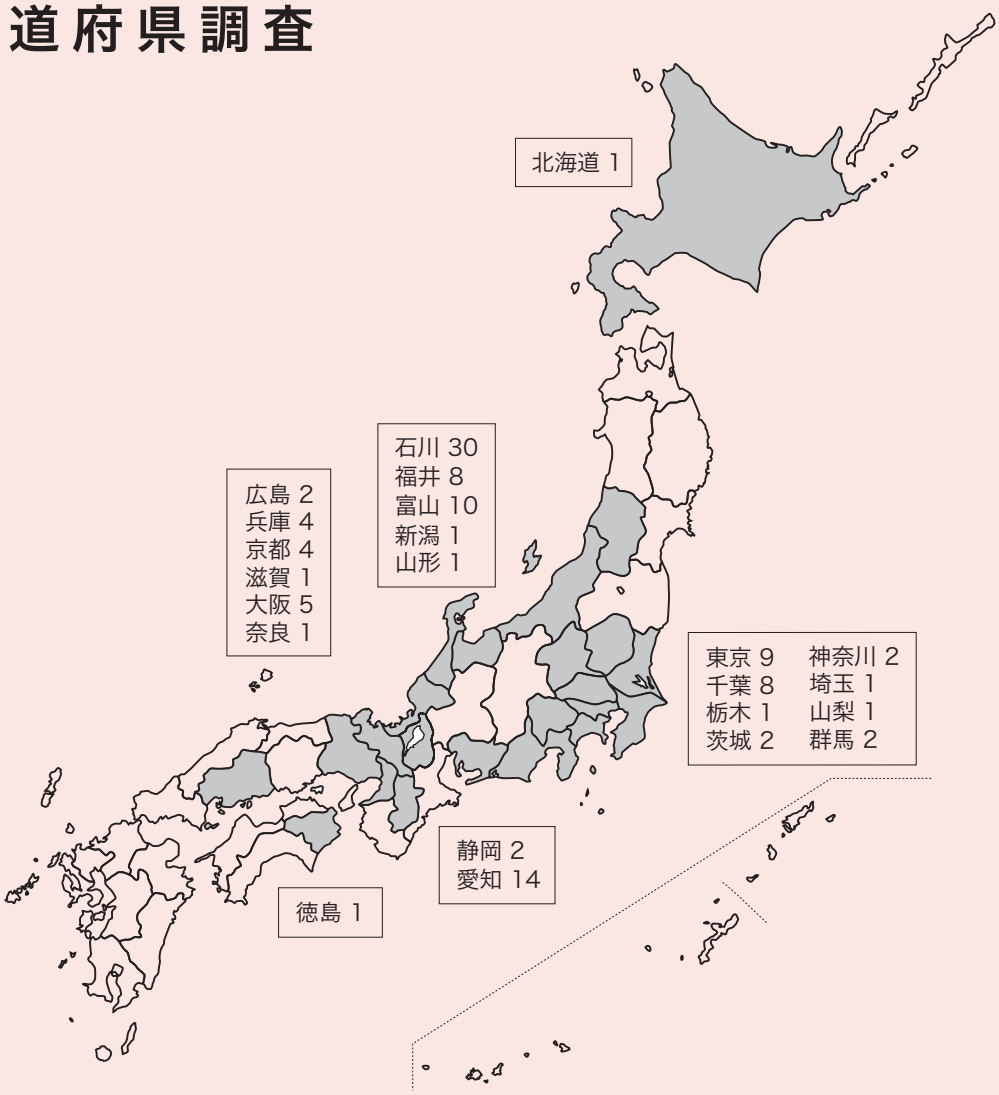
医師は人の「生きる」を助ける仕事ですが、日本で生活していると、「生きる」という事が何なのか考えたこともありませんでした。「生きる」とはどういうことなのか、どれほど大変で、大切なことなのか考えるきっかけをくれたバラナシでの生活は、私にとってかけがえのないものになりました。

令和3年3月卒業者進路

赤松　洋光
秋山　裕美
池田　　恵
石川聖太郎
石田　浩一
石原　克弥
石丸　雄基
磯村　直紀
稲田惇一郎
今崎　克也
井村　慎吾
宇田　菜都
梅村　太一
梅本　雄太
太田　有美
大野　良和
小川　誉元
奥村　兼汰
押尾　香那
柿本　梨花
片岡　大智
加藤　幹雄
金田　有史
上山　健斗
亀井　　駿
河上　陽介
川住　宗生
岸　　知弥
岸本　俊輔
北岡　舜平
北山　怜奈
木戸口健士
木村亜里紗
木村　里紗
國田　哲也
桑原　大知
小泉　直生
小市　佳奈
小島　寛子
小島　史也
児玉ひかり
後藤あゆみ
齊藤僚太郎
佐伯　　翼
酒井　悟臣
坂野　勇人
坂本　和之
坂本　達也
櫻木　千夏
笹野　寛哲
佐藤　教裕
嶋口　優太
正村啓二郎
白藤憲太郎
新開　研登
新保　孝仁
高木　優輔
髙橋　祐希
立村　直也
中条　裕一
手塚　　聡
土部　友暉
冨澤　咲良
中正香奈江
中西　雄紀
仲西凜太郎
中村　紗都
波平めぐみ
新美帆乃佳
根本　清正
野瀬　琢真
能登　美波
野村　駿希
橋田真之介
林田　珠奈
平谷　菜生
広多見和子
藤田　健央
船登　美羽
古川　　諒
細木　康平
毎田　彩季
前川　翔平
前田　泰之
前原　利勝
又野　祥輝
松井俊一郎
松本俊太郎
水野　杏里
南川　真季
宮川　弘亮
宮本　貴旺
森　新太郎
森田　一矢
安田　　力
山口健太郎
山﨑　智史
山崎　大海
山田　智彦
山田　洋輝
山田　寛之
山村　卓矢
山本　美樹
吉岡　佳子
吉岡　稔拓
吉川　佳吾
吉田　純梧
吉田　聖宏
吉野　啓純
吉野　　航
吉本　有佑

（五十音順）

令和3年度 医薬保健学域医学類入学者 出身都道府県調査



会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。

①自動引き落とし（手数料本会負担）

本年度より取り扱いを開始いたします。お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。
折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。
是非この機会にご検討くださいます様お願いいたします。

②払込用紙（手数料本会負担）

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

③銀行ネット決済（ネットバンキング）

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。
（お振込の際は、**ご氏名の前に会員番号のご入力**をお願いいたします）
北陸銀行　小立野支店
普通預金　６０５１０４７　金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局
TEL：０７６－２６５－２１３２　FAX：０７６－２３４－４２０８　Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

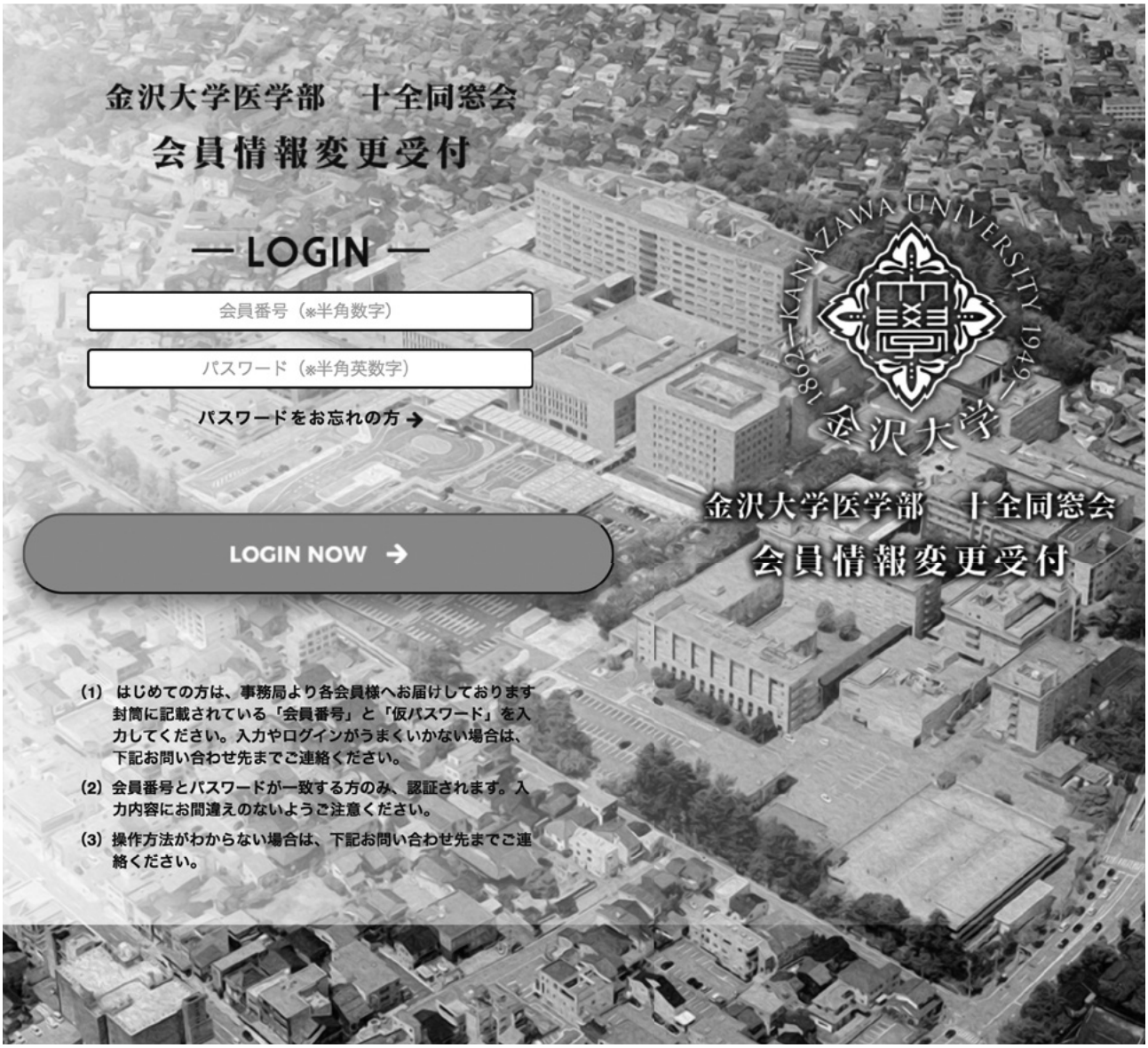
十全同窓会名簿改訂についてのお願い

2021年度に十全同窓会名簿改訂を行います。
記載内容(住所・勤務先・役職等)に変更がある場合には、
同封の「名簿掲載事項確認届」にて、十全同窓会事務局宛、
または十全同窓会ホームページ内の会員情報変更受付ページよりお知らせくださいますようお願い申し上げます。

連絡先　〒920-8640　金沢市宝町13-1
金沢大学医学部　十全同窓会名簿編集係
Email：juzen-ob@med.kanazawa-u.ac.jp
FAX：076-234-4208

締切日　2021年6月30日(水)

十全同窓会名簿編集委員長　土屋　弘行



「会員情報変更受付」ページはこちら

「会員情報掲載許諾および変更届け」PDFデータのダウンロードはこちら

寄附制度のご案内（金沢大学医学教育研究支援寄附金）

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年９月に本学類・系が行う教育・研究に役立てることを目的とした≪金沢大学医学教育研究支援寄附金≫を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学　医薬保健学域　医学類長
医薬保健研究域　医学系長
杉山　和久

【担当（お問い合わせ先）】

〒920-8640　金沢市宝町13-1　医学類B棟1F
金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
Tel：076-265-2115
E-mail：t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

・　電子メール又は電話でのお申込み
　上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。
　現金のお持ち込みにより、ご寄附いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

・　寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。（※所得税法、地方税法ともに２千円を超える寄附額から控除対象となります。）
・　寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

新型コロナワクチン・治療薬開発寄付口座のお知らせ

医薬保健研究域長
中村　裕之

十全同窓会会員の皆様へ

金沢大学医薬保健研究域は、この度の新型コロナウイルス感染症克服のために、伝統的な基礎および臨床研究力を生かし、ワクチン・治療薬の開発等に関わる研究を行っております。

この度、三井住友信託銀行との間において「新型コロナワクチン・治療薬開発寄付口座」を設置し、その寄付金を基に、現在、６つの研究グループが、その支援を受けて研究を鋭意、進めております。そこで、さらなる飛躍的な研究を行い、一層の研究力の向上を図るためにも、当ファンドは2020年８月を持って終了いたしましたが、同窓会の皆様には引き続きご支援を賜りたいと存じます。

同研究域は社会および人類に貢献するために一層の努力を惜しまない所存でございますので、何卒、ご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

■寄附お問い合わせ先

金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
電話：076-265-2115（直通）
E-mail：t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

■新型コロナウイルス感染症に関する研究紹介Webサイト
https://corona-study.w3.kanazawa-u.ac.jp/

金大病院コロナ基金へのご支援のお願い

附属病院長
蒲田　敏文

十全同窓会会員の皆様へ

当院は昨年４月から新型コロナ感染症の患者を受け入れ、50名を超える重症患者に対し人工呼吸器やECMO等による集中治療を行ってきました。写真にあるように40名を超えるスタッフからなるCOVSAT（Covid Special Assistant Team）の献身的な治療により、多くの重症患者は感染症を克服し、元気に歩いて自宅に戻ることができました。

今後も金沢大学病院は職員一丸となって、新型コロナ感染症患者の治療に頑張ってまいります。同窓会の皆様には、当院へのご支援のほど宜しくお願い致します。すでにご支援いただいた同窓会員様には、心より感謝申し上げます。

（COVSATによる腹臥位療法）

■お申込方法

金沢大学附属病院 新型コロナウイルス感染症対策基金
金沢大学附属病院ウェブサイト内の専用ページにて、お手続き願います。
https://web.hosp.kanazawa-u.ac.jp/oshirase/2020covid19_kifu.html

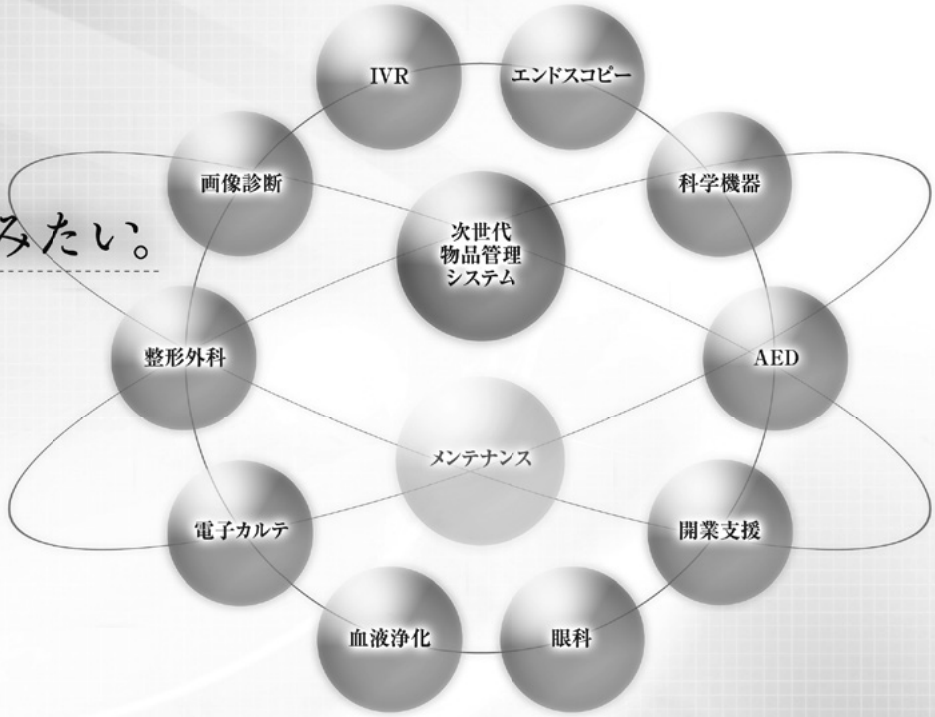
▼お申込みフォームへ

金大病院コロナ基金　検索

■お問い合わせ先

金沢大学 病院部 経営管理課 予算企画係　電話：076-265-2066（直通）　E-mail：hpyosan@adm.kanazawa-u.ac.jp

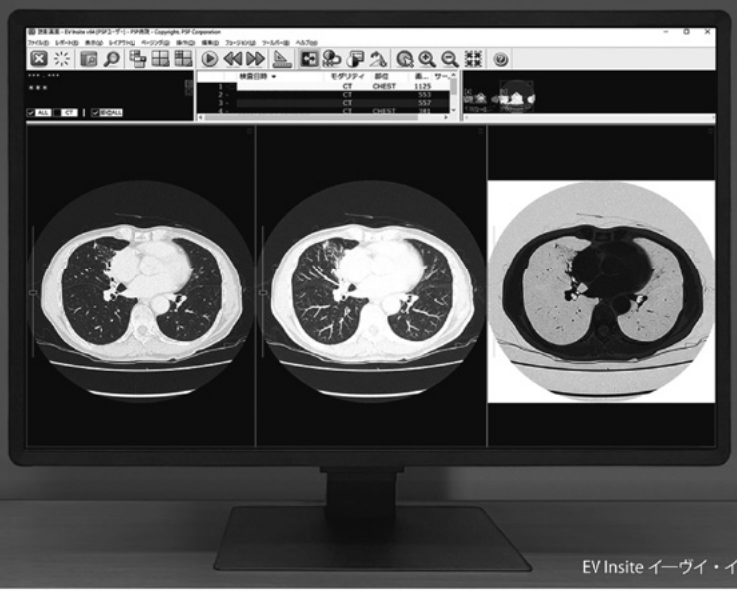
医療とともに
大きな夢を育みたい。



冨木医療器株式会社
http://www.tomiki.co.jp

本社　〒920-8539 金沢市問屋町2-46　TEL(076)237-5555(代)　FAX(076)237-6584
支店　金沢・富山・福井　　営業所　七尾・高岡

お手元での快適な画像処理を実現します



EV Insite イーヴイ・インサイト 認証番号：227ALBZX00016000

先進的技術と発想で、医療の明日を支える
医療システムは PSP 株式会社
〒105-0001　東京都港区虎ノ門5-13-1　TEL 03-4346-3180　www.psp.co.jp

2021年、テルモは創立100周年を迎えます。

テルモ株式会社

100周年記念サイト
www.terumo.co.jp/100th/

TERUMO

nihon medi+physics

明日の幸せを願い、「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、がん治療用の医療機器、治療薬などの創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代) https://www.nmp.co.jp/

日本メジフィジックス株式会社

2020年6月作成

Empowering Life

サノフィは、ヘルスジャーニー・パートナーとして、
私たちを必要とする人々に寄り添い支えます。

サノフィ株式会社
〒163-1488 東京都新宿区西新宿三丁目20番2号 東京オペラシティタワー　www.sanofi.co.jp

SANOFI

ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る"舞台"という発想のホテルです。
地上30階、高さ130mは北陸随一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一縁のおもてなし。

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1(JR金沢駅兼六園口前)
Tel : 076-234-1111　Fax : 076-234-8802
ホテル日航金沢 検索 www.hnkanazawa.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員（13名）

蒲田　敏文
中村　裕之
横山　　茂（副編集委員長）
絹谷　清剛（編集委員長）
篁　　俊成
和田　隆志
佐々木素子
谷口　　巧
山本　靖彦
中田　光俊
倉知　　慎
毎田　佳子
濱口　儒人

学外編集委員（23名）

山口　成良
津川　龍三
赤祖父一知
佐藤　　保
三輪　晃一
橋本　琢磨
中村　信一
勝田　省吾
山本　　健
山本　　博
山岸　正和
太田　哲生
大村　健二
横山　　仁
大島　　徹
横山　　修
中本　安成
高村　博之
常山　幸一
古川　健治
古市　賢吾
若山　友彦
中西　清香

以上36名で構成されています。
土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。

表紙の写真

宝町キャンパスの桜

2021年の春は桜の開花が例年より早く、金沢大学角間キャンパスでは、本部棟前の標準木（ソメイヨシノ）が3月26日に開花しました。その後も暖かな日が続き、宝町キャンパスでも早くに満開を迎えています。

題字：山本　　健（十全同窓会会長）

発行：**金沢大学医学部十全同窓会**
会報編集委員会
〒920-8640　金沢市宝町13-1
http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp

発行日：令和３年５月31日

印　刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い　｜　**十全同窓会名簿は本年１２月上旬刊行予定**

編集後記

金沢大学附属病院が、昨年（2020年）4月15日に1例目の新型コロナ感染症の重症患者を受け入れから早いもので１年が経ちました。現在までに50数名の重症患者の治療を行ってきました。COVSAT（Corona Virus Special Assistant Team）の活躍により多くの患者さんは回復しましたが、残念ながら4名の患者さんが亡くなられております。一旦終息するかのように見えたコロナ感染症は、今度は変異型ウイルス感染が拡がりをみせており、全国的には再び感染者数が急増してきています。金大病院は今年度も重症患者の受け入れ体制を維持していきます。医療従事者に対するワクチン接種も金大病院では3月20日から始まり、2200名余りが1回目の接種を終えました。4月10日から2回目の接種が始まっています。早くワクチンが日本全国に普及し、新型コロナ感染症が終息することを祈ってやみません。

金沢大学医学系および附属病院では、内科が2019年4月から、外科が2020年4月から一つに統合され、臓器別に再編成されました。特に外科系では旧第2外科が胃腸外科と肝胆膵移植外科に分かれ、胃腸外科は稲木紀幸教授が、肝胆膵移植外科は八木真太郎教授が就任しました。お二人は年齢（49歳）も卒業年度も同じで、しかも内視境手術のエキスパートです。八木教授は肝移植の経験も豊富です。八木教授は昨年12月に赴任されましたが、2年以上も休止していた肝移植を本年の3月に2例続けて施行して頂きました。北陸では金大病院のみが肝移植を行ってきましたが、これからも肝移植が可能な体制が整ったことは病院長として大きな喜びです。二人の若い消化器外科教授の今後の活躍を期待したいと思います。

3月31日の北國新聞朝刊の1面でも紹介されましたが、金沢大学附属病院では本年4月より60数億円かけて新棟の建設を開始します。手術待ち期間を短縮させるには手術室を増やすしかないと考え決断しました。新棟は4階建てで、4階には手術室を6つ新設して新旧合計20室とする計画です。ロボット支援手術装置やTAVIを増設するほか、脳外科の手術室には3TのMRI装置も設置し、術中MRI検査が可能になります。外科医や麻酔科医の協力を得て、日本をリードするようなインテリジェントな手術室にしたいと考えています。新棟は令和5年末に完成し、令和6年1月から運用を開始する予定です。

金沢大学医学系、金沢大学附属病院は今後も北陸の医療の発展のため頑張ります。十全同窓会の先生方におかれましては、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

（蒲田　敏文：記）